

地図と空中写真、見聞談：敗戦時とその後（続）

佐藤 久（東京大学名誉教授）

ヤペン島調査とニューギニア引き上げ

前報告（『外邦図研究ニュースレター』3所収）は、翌日にもマヌクワリ港に帰還できたかのように終わりましたが、オブフォール海岸¹⁾に迎いのダイバーボートが姿を見せたのは、別れの宴から五日もの後でした。欧州戦線で活躍し「空の要塞」と誇称した、当時世界最大の四発重爆撃機 B17 によるマヌクワリ空襲が、7日・9日・15日と繰返され、市街と港湾施設が完膚無く破壊され尽くしていたのですから、調査隊本部も、船の手配どころではなかったでしょう。

5月23日の朝、第三光洋丸から班員が目にした懐かしのマヌクワリは、幹をへし折られた木々の間に垣間見える、積瓦礫と焼けトタンの原っぱでした。中心街区から離れていた調査隊宿舎は幸運にも爆撃対象から漏れ、食糧や調査用資材も、ここに運び込んであった分だけは、少量ながら全く無傷でした。然し、次回以降の調査には到底不十分で、それ以上に、急な戦局の傾きが調査継続を無意味・不能なものとしていました。そこで、第一回調査終了の段階で各班は編成を解かれ、「ニューギニア調査隊」も解散同然になりましたが、それまでのフィールドワークに飽き足らなかった一部の隊員らは、残存する食糧・資材を融通し合って三々五々、自由な組み合わせで次の調査へと立ち向かったのです。

第二班のプラフィ川上流域調査には、他班と同様に、路線図の作成に測量班が随伴していました。然し、トランシットと箱尺を抱えての測量班員は、調査班員の足には追いつけません。そこで、正式な報告書作成までの繋ぎとして、地理屋の卵である私が、歩測とクリノメータ測角で簡単なルートマップを作ることになりました。当時の野帳も、日付・方位・歩数と、ほとんどが数字の羅列ばかりです。卒論のフィールドを放り出して参加した 正確には、参加させられた 私としては、それに見合う何かを持ち帰る必要があり、このままでは帰国出来ません。そこで、ヤペン（ヤーペン）島を次の調査地に選んだ旧第二班の鉱物班、資源科学

研究所員の石橋・坂両氏にお供することに決めたのでした。

ヤペン島は、ヘールフィンク湾の湾口を塞ぐように東西に長く横たわる、沈水海岸に囲まれた恐らくは地塁島です。その南岸中央にある主邑セルイでは、建設隊が港湾整備にあたっている、と苦力募集に都合の良い情報もありました。一方、泉氏ほか京城帝大関係者は、ヤペン島の北方の、ピアク島を次の調査地に選んでいました。ここは三角形に近い長円状の隆起珊瑚礁（小環礁）島で、地形的には魅力がありますが、有用な地下資源は期待薄。開戦後、日本軍の快進撃に刺激されて決起したパプア王国樹立運動の中心勢力がたむろし、治安が必ずしも良好とは言い難い反面、礁湖跡の平地に建設された飛行場の守備に、陸軍部隊が駐屯（後に米軍の侵攻で全員玉砕）してもいたところです。

ヤペン島調査では、苦力募集の期間中にベースのセルイ周辺を調べ、次いで陸路を北海岸まで横断、さらに船で島を一周して海崖の露頭を観察する、と計画されました。当初予定では、調査員1・助手3に通訳・護衛兵・巡警等、総勢で8~9名とかなりの員数にのぼり、装備も天幕・パイプベッド・炊事道具その他、第一次調査に匹敵する大掛りなものになる筈でした。然し、戦局急迫に浮足立つ調査隊では通訳の確保も困難。結果的には参加日本人が半減し、自然物利用のカナカ式露営を中心とする、少数・軽装備での短期決戦方式に切り替えることに決定。野帳には、その大半が線で消された、当初予定の参加者・携行物品名・数量など、数頁に及ぶ書き込み、夢の跡が残っています。

こうして小型・軽量化された新第二班は、プラフィ調査での採集品の整理・梱包を終えた後、京城大グループを追うように、28日午後、またも第三光洋丸でマヌクワリを出港しました。セルイ入港は翌29、土曜日。この町の中心は、人口数百とかの海上集落でした。陸地には、棧橋と小さな倉庫、役所や学校と付随住宅、それに市場、略奪・暴行で廃墟となったヒーナトコ（支那人経営の商店）など、要するに、都市的機能だけが立

地。港湾整備に駐在の日本人も、資材補給が無く手持無沙汰の様子で、物見遊山と取り違えた筈もないでしょうが、山に入りたい、と調査同行希望者が何人か。苦力募集を助けて戴く以上、無下にも断れません。彼らの差配をお願いすることにしてお一人だけの特別参加。

現地での経過を簡単に述べると、翌週は苦力募集に数日。その間、隊員はセルイ周辺の海岸の調査。とかくするうちに、坂氏がマラリア再発で発熱。数日後には石橋氏も同じく発熱病臥。それまでの症例から見ても、回復まで十日前後は必要です。以後の日程を考えると、^{じんぜん}荏苒日延べを重ねる訳にもいかず、とうとう7日の朝、港湾設営隊のO氏と私とだけで、インドネシア人巡警2名、苦力24名と共に出発することになりました。それでも、サンプリングと歩測とを重ねつつやっと分水界らしい尾根筋まで北上したところで、残念ながら時間切れとなり、無念の敗退。以後は往路を一目散に駆け下り、約一週間後のセルイ郊外で、発熱が治まった石橋・坂氏らに対面。無事帰還を歓迎、慰労されました。

そして今回も渡船手配で数日を無為に過ごした後、ピアク島発の岬南丸でマヌクワリに帰還。はや23日で、実働日数が50%にも達しない非効率さ。これぞ「N.G.調」流でした。

この船待ちの間に、強運を誇った私もついにダウン。やはり熱帯熱マラリアで、連日の発熱と、午前中の40前後の高体温が夕刻から夜間には37~38と平熱に近く下がると云う、奇妙な症状が特徴的です。熱と発汗の疲れにふらふらしながらも、官給品返上や私物の整理。後者は携行品と研究機関などへの別送荷物の区分・再梱包です。さらに、「後を濁さず」と残存者総員で宿舎の大掃除。加えて、「恩賜の煙草」下付、民政府総監の挨拶と調査員送別宴などと、軍隊らしい儀礼的雑事に数日を空費する間に7月に入り、やっと6日に「調査隊棧橋」で携行品の船荷積み。眺め親しんだ景色の中を、アルファック山に見送られてドレー湾を後にしたのが、故国では星空に供えする翌七夕の午後でした。

さらばN.G.よ！そして、「敗残兵」と帰国の船旅

帰国第一歩、パラオまでの乗船は、光洋・岬南より

モークラス上、約250トンの木造機帆船、その名は天神丸でした。

民政府部内でもすでに撤収作戦が始まっていたらしく、調査隊棧橋で乗り込んだ二百を超える人員の中には、かなりな数の民政府下級職員が含まれていました。手荷物は各自、旅行鞆大の1個程度に限定されていた筈ですが、そうした(元?)職員の中には、別に枕大の袋を下げた数人がおり、「エヌジーみやげの砂糖」と、自慢げに語っていました。そんな手土産が調達出来たとは、恐らく本部炊飯所にでも巣くった鼠だったのでしょう。私らもヤペン調査で余った砂糖を分配・所持していましたから、他人様の所業をとにかく云う資格はありませんけれど、一人当たりでは、せいぜい茶筒半分の程度。なお戦中、国内では砂糖の配給が絶えて久しく、サッカリンが高騰し、庭にアマチャ(甘茶)が植えられるなど、甘味不足が常態化していましたから、さぞや大喜びされた筈の土産物です。

土産自慢はさておき、もはや誰もが自由(?)の身。奏任・判任・無官の区別も差別も無くなった百把一からげの世界に、雑居・満員の船倉は息苦しく、甲板に出て消え行く島影に別れを惜しんだ後は、ブリッジの風蔭に席を占めました。間もなくそこで、驚くべき現実を発見。なんと、わが天神丸では、船橋に羅針儀が見えないのです。代わりに五十路絡みの船長が、時折、懐中時計大のポケットコンパスを覗きながら、操舵を指示し、また自ら舵輪を廻すのでした。「徴用(される)前は、ほとんどが上海通い。船乗りになって以来、何百回と通った海だから、玄界灘(東支那海のこと)は自分の庭と同じ！」由でしたが、豪胆と云えば聞こえは良いものの、些か呆れました。太平洋では、ことに内南洋(南洋委任統治領の別称)のように低平な小島ばかりの海域では、わずかな誤差でも危ないのでは？

案の定、わが天神丸は、絶海の迷子になりかけました。二日経って、昼頃にはパラオに入港できる筈が、夕方になっても属島ペリリューの島影すら見えません。やがて薄暮が宵闇に移る寸前、東の水平線に点滅する微光。日本の駆潜艇に発見されたのでした。発光信号で遣り取りの後、進むべき方角を教えて貰い、大きく東へ転針。後で聞くと、フィリピン(多分、ミンダナオ島)沖に来ていた由。北赤道海流の影響を軽視乃至無視したか、それとも、この頃、流れが異常に強力にな

っていたかの、どちらかだったのでしょ。

こうして予定の一日遅れでパラオ礁湖に入港し、一夜明けて上陸したコロールの町に、半年前の生気は見られませんでした。翌日、気の好い船長にも別れを告げ、沖掛かりの貨物船に移乗。それが、「本艦本船同士は接舷出来ない」決まりがあるそうで、感心すべきか呆れるべきか、いちいちサンパン（^{はしげ}解）を介しての、手間と時間の掛かる乗換えです。

この船が帰国船、とは早合点で、さらに三日ほどの後に再度の移乗。今度の船は三千何百トンとかの貨物船（失名）で、船体は赤錆だらけ。僅かながら傾いてもいるようでした。翌日から翌々日の出港後に知ったことながら、ソロモン海域での生き残り、歴戦にも耐えたしづとい船だったのです。しかも、この船には沢山の先客、歩兵部隊の残党が収容されていました。大半は、砲弾・魚雷が爆発し艦船が轟沈する海に浸かり漂流しながら、しかも命をつなぎ止め得た強運の人々。船倉で威勢の良い一団は「ソロモン敗残兵」と自称し、何彼に付け酒を呷っていましたが、「酔っ払ってでもいないと、思い出して思い出して、怖くてたまらない！それによく、仲間が枕に立つんだ」と、つらい心の内を明かしてくれた上等兵（下から3番目ながら、かなりの訓練を経た筈の階級）もいました。彼は、戦友たちが次々と波間に消える中を、ボートの破片にしがみついて、一昼夜の漂流に耐えた、とか。「熱帯でも、ソロモンの海は冷たいですよ」とも。

天神丸では、民政府職員の某氏が輸送責任者となり、以後もそのままだった筈ですが、トン数だけで十倍以上も大きい船ともなると、広さは広し構造も複雑で、統率も纏まりも付けようがありません。調査員諸氏には果たして船室が与えられたものか。その他も各自が好き勝手に居場所を定め、甲板から船倉まで、全員がてんでんばらばらに……。

一方、「敗残兵」の中には、物陰で膝を抱え宙を見据えたまま、身動きひとつせず、もちろん応答もしない孤独な影。また、甲板から波しぶきを目で追いながら、絶えず何事かをブツブツ呟き続ける者。彼らはもはや心神をも侵され、虚脱痴呆の域にあったのでしょうか。なお、飲んだくれ上等兵氏は、数日後にも甲板に上がって来て、「海軍（の艦艇）は、（沈みかけている）輸送船などには目もくれない。素通りして仲間送船（艦艇乗組

員）の救助に行ってしまうんだ。」と、憤りに声を震わせながら、激戦の一夜を語ってもくれました。まあ、いろいろ不満も誤解もあるだろうけれど、助かったから良かったじゃないか、と役にも立たない慰め(?)を返したのですが、往路に船員から聞いた「……、付けて軍属²⁾」を思い出すと、誤解が正解なのかも、の実感。訓練に金と時間が掛かっている水兵・将校と、たかが1銭5厘³⁾との違い、なんだろうナ、と。

ドレー湾がダイバーボートで埋め尽くされ、^{オーストラリア}「濠州進攻作戦間近し！」の噂が流れたことがあります。物好きにも「六十数隻までは……」数えた暇人が出た程の偉観でしたが、それが一夜にして姿を消した旬日ほど後に、「ガダルカナル島からの転進作戦に成功」の大本営発表がありましたから、小型木造船の大群こそは、夜陰に乗りレーダー探知を避けての撤収=退却用だったのでしょうか。この件について、上等兵氏は何も知りませんでした。そんな質問をした私をシンパ(?)と思ったらしく、その後、仲間とともにやって来て、ガ島攻防の海域で如何に無謀で無計画な戦いが行われたか、と、「非力な皇軍」の作戦批判までも披露してくれました。Y 高等商業学校（新制大学の商学部）卒業のインテリ青年で、^{しらぶ}素面のときはなかなか雄弁。話の筋も立っていました。

これらの要旨をも含む船上での見聞を、私は表紙に「安山岩」と記したノート⁴⁾に書き留めたのですが、これが上陸時の検閲に触れたらしく、5月中旬以降の日記帳と共に、携行荷物から抜き取られていました。「安山岩」はともかく、日記に不穏な記載は無かった筈なので、こちらは懲らしめに意地悪されたのかも知れません。また、往路はフィルムの防湿保管に用いた、砂糖入り茶筒も同じ処遇。これは禁制品である訳もなく、係員の「役得」なのでしょう。より大型な「枕」も、また当然、エヌ・ジエの運命に？

そんなわけで、以下もなおメモの切れ端と曖昧な記憶とに頼るのみですが、7月20日頃の早朝、雨上がりの豊後水道は蒲戸崎と地蔵崎の沖を近々と通過して、手が届くほどの滴る^{みどり}翠に感激。緑一杯の熱帯降雨林に飽きるほど長く身を置いたにも拘わらず、盛夏日本のミドリは、また格別の趣でした。午後に至って、造船所らしい工場がある島の北方沖に投錨。誰かが、宇品を通り越して因島まで来ちまったヨ！と呟きました。

翌朝、反対側の舷側から、波打際を豆粒のような汽車が走っているのが見え、にわかに「帰国」の実感が湧いてきたのですが、ところが、これからが拷問の日々。船は沖掛かりのまま動く気配が無く、下船の許可も出ません。お預けは、理由不明⁵⁾なまま一週間近くも続き、汽車の影もシゴキに変わっていました。宇品港への回航は、26、7日頃だったでしょうか。

帰国後の多事多端と、日本地理学会書記の手伝い

上陸当夜は姫路行最終列車。翌朝、茶色に汚された白鷺を駅の正面に望み見て大阪へ。始発の青森行急行に即時乗換えて、翌々払暁に帰宅。パラオの絵葉書を最後に私からの連絡が絶え、宇品発信ウナ電⁶⁾を見るまで、海の藻屑と諦めていた由。状況の変化で「郵便物は空輸」の約束を反故にするのなら、せめて留守宅には、「ニューギニア到着」の通知くらいはあって然るべきだったでしょう。「軍」なる組織への不信感も、一段と高揚。父が重篤な病床にありましたが、二日ほど看病して上京。市と府が消滅して東京都が生まれていました。まずは辻村先生宅に帰国報告。今年度から新設の大学院特別研究生⁷⁾に推薦した、旨のお言葉を土産に帰宅。半月余の後に父を送り、気が緩んだとみえてマラリアを再発。さらに、中四での留年以来、飼育殺しだった結核菌までが反攻の気配。医者も有効な薬を入手出来ない時代で、前者は成行き任せ、後者には、紫外線照射と人工気胸術（肋膜との間に空気を注入、肺を圧縮して安静度を高める）の物理療法で対処。

この間、卒業に必要な選択課目の単位確保のため、『板根に関する一考察』なるレポートを急遽作成し、聴講中断の事情説明と共に、植物生態学担当の中野教授に送付提出。また卒論は、修学年限の6ヵ月短縮は文部省・大学が一方的に決めたこと故、年度末までに作成提出すれば良い筈、と勝手な理屈で後回し（『西部ニューギニア、ヤベン島の地形地質』と題して、翌年2月に提出）夏休み明けには上京して、教室の諸先生にも帰国挨拶をしましたが、徴兵年齢の1年引下げ決定に伴い、9月下旬に臨時徴兵検査が行われることになったため、21日の学徒出陣式（神宮球場での雨中行進は文系卒業生のみ）はとまかく、25日の卒業式にも出席できませんでした。

徴兵検査は26日。思惑が外れて第一乙種⁸⁾での合格。

もはや、半病人までも駆り出さざるを得ない状況に陥っていたのでしょ。一緒に検査を受け、同じ騎兵連隊（実質は戦車隊）に配属を指定された小学校以来の友は、北満に送られた後、沖縄に転戦してガマ（洞窟）で戦没。私らは、文系の犠牲の上に永らえた命です。

10月初旬に再度の上京。特研究生としてのスタートです。与えられた最初の仕事は、日本地理学会の機関紙『地理学評論』の編集・校正の手伝い。戦前、東大地理学科の学生は、入学当初から半ば義務的に校正作業に動員され、見返りに地理学評論のその号を頂戴したものでした。まだ入会資格を持たない学生らに、地理評を与え読ませる方便でもあったのでしょ。それはともかく教室では、初代山崎直方先生やまさきなおまさ以来の助手、東木竜七氏が亡くなられ、後任に中国戦線から帰還・除隊した吉崎恵次さんが就かれていました。吉崎助手は、東亜研究所兼務のうえ、東北帝大に新設予定の地理学講座に転出する田辺健一氏の役（日本地理学会書記。当時は会員2名が無報酬で従事。木内信蔵助手が前任）をも継がれたので、多忙の補いにと、その一端を私が言い付き、常務評議員会（後の常任委員会）にも陪席。先生方も人の子、と社会勉強にもなったのでした。

「日本諸学振興委員会地理部会」第一回講演会と云う、同部会の最初で最後になった講演会が、変則的な新学期を迎えて間も無い11月25・26日に、上野の帝国（現、日本）学士院講堂で開かれました。学会書記や院生らも受付などに総動員。昼は、北田・花井・多田・下村・岩田・望月・福井（25日）室賀・和田・飯本（26日）の諸先生。そして25日夜の「公開講演」は、岡部文相の挨拶に続いて、辻村太郎：太平洋地域火山の地理、小牧實繁：皇国日本の地政学、と、不思議な取り合わせでセットされました。小牧先生が常々、「敵国アメリカのデービス学説の受売りは、言語道断な国賊的行為！」と、辻村地形学を声高に批判・攻撃していることは学界周知。公開講演のこの取り合せは、いったい何方の企画であったものか。もとより小牧先生は、そんな気配を毛頭感じさせることもなく、神懸かりな自説のみを、常のように姿勢正しく、音吐朗々と。一方、辻村先生またいつもの如く、斜め上を向いての低声は、まさにその対極。戦後の「教職追放」で、私には、これが小牧先生のお声の聞き納めになりました。

『地理学評論』誌の編集・発行難

昭和17年の末に、学術誌を含む諸雑誌への用紙割当てが一律40%も削減され、それまで毎号90頁台だった地理学評論も、18年の19巻1号では50頁前後と薄くなっていました⁹⁾。各学会とも対策に苦慮し、19年初頭には、地理学・動植物学・林農学などの博物系諸学会が、当時唯一の法人格所有学会であった東京地学協会の傘下に集まり、文部省や配給権を握る日本出版文化協会への、要請・陳情にも参りました。しかし、無い袖は振れずと、「一律削減」は撤廃も改善もされません。そこで、著者への別刷り提供を廃止する一方、誌上に会告を反復掲載して会員に投稿論文の圧縮・簡潔化を求めましたが、効果はほぼ皆無。やむなく、発行号数を減らしての用紙・経費対策。また当時は、編集専門の委員会も査読制度も存在せず、月1回の常務評議員会の席で、担当役員が提示する編集原案を、ほとんど形式的に審議承認するだけでしたから、データだけの羅列や冗長・曖昧な文体などの類には、文意を損なわぬよう心しながらも、チンピラが大鉈ならぬポケットナイフを振らせて戴きました。

雑誌休刊には、印刷所の能率低下による発行の大幅遅延も関係しています。その頃は、徴兵・徴用による文選・植字工の不足と技能低下が著しく、三校(3度目の校正刷)まで取ってもゲタが散乱¹⁰⁾。こうした難点・徒労が日を月を追って増える一方、用紙不足対策と国論統一の建前とによる内閣・出版会の方針で、19年春から学会機関誌の整理・統合が強力に勧められたのです。地理学界にも、大塚地理学会の機関誌『地理』を『地理学評論』に合併することが求められ、また夏頃には、発売所も地人書館に変更されました¹¹⁾。

その一方、印刷所が軍に徴発されたあげく、新規印刷所の探索に難航して休刊が継続。4・5月合併号に当たる20巻4号を刊行できたのが秋、9月でした。追いかけての5号発行もつかの間、6号(19年9月号)はついに越年し、完本の直後に地人書館が被災(そのため、二代目社長の兵役除隊で出版業を再開していた古今書院が発売所に復帰)して会員送付分を焼失。書店配布済みの少数部が希覓誌(?)となりました。古今書院の狭い応接間で徹夜の校正に当たり、初代の未亡人が親切心から増やして下さった練炭火鉢で、当世流行(?)の一酸化炭素中毒死をし損ねたこともあります。コピーをたや

すく作成・保存出来る時代ではなく、こんな苦労も、やがて理想社(印刷所)もろとも、またもやの灰燼。幻の第20巻7号(「論説」原稿の著者許残存分は、復刊後に再録)で、以後、新規印刷所を求めかねるまま、『地理学評論』は2年余の長い休刊期に没入します。

陸地測量部に囑託兼務

「陸地測量部から空中写真の解読を手伝える地理学者が欲しいと云って来ていますが、良かったら覗いてみてはどうですか」のお勧めを戴いたのが、昭和18年も末の、御用納めに近い頃でした。中学時代に、国鉄建設事務所(の記念行事で、実体鏡下の立体像(下田線伊東線伊東以南の旧名 建設に空中写真測量が採用された)に動転したことがあり、大学入学後は、科学雑誌の木本氏房大佐の解説¹²⁾や武田通治陸軍技師の啓蒙(?)書なども拝読済みで、裸眼(肉眼)実体視も独習。ニューギニアでは利用し損ねたものの、関心が一段と高まって折でしたから、翌御用始めの早々に、三宅坂¹³⁾へ出掛けました。

衛兵に用件を伝え、出迎えの方に案内されたのが、たぶん別館の2階。南面で明るさ一杯の第2課写真判読班の部屋でした。窓を背にしたデスクに班長の武田技師。このときの印象が強かったためか、後の世にはよく、武田氏の肩書を第2課長と間違えて話したり書いたりしたものです。実際は、軍の機関なので、課長以上の地位は「軍人」に占められていましたが、彼らも何故か、軍服よりも、背広姿のほうが多かったような気がします。

この時、私の仕事の内容と週に何日勤務出来るか、などを相談し、角部屋の総務課で武藤勝彦技師(後の、第二代地理調査所所長)にも紹介されました。帰り際に、『研究蒐録地図』を戴きました。今のA5判相当の大きさで68頁、内容的には後の『地理調査所時報』の前身にあたる冊子です。表紙に、昭和十八年二月陸地測量部とあり、口絵には、後に富士山の撮影家として有名になった岡田紅陽氏の「新高山」¹⁴⁾と、前年末に分光カメラで撮影された天然色写真、桜田堀越えの「陸地測量部」が載っています。カラー写真印刷の曙光期で、3色で撮り分けたネガによる3色プラス墨版の四色網版印刷です。

頂戴した「地図」には号数が無く、編集後記で通算2

号と知り、出来たら1号も、とねだりましたが、十七年刊の創刊号はすでに品切れで残念。3号が出た十九年秋には、武田氏が外地に出向された後で、後任の班長からは頂戴出来ませんでした。地図が「部外秘」扱いの冊子だったから、でしょうか？

なお、同2号誌の第三表紙(裏表紙裏)に「委員及連絡主任者」なる22名の名簿があり、そこには、外地部隊名と所属個人名も並んでいます¹⁵⁾。各部隊の具体的な所在地は不明ながら、これらには測量隊または陸測[陸地測量部の略称]部員が所属し、空中写真の撮影乃至は図化作業にあたっていたと考えても、大きな間違いはないように思います。また、民間会社の建前なので此处には出ていませんが、半官半民の国策会社、満州航空株式会社(満航)の「写真処」¹⁶⁾も、日中戦争の初期から偵察撮影に参画していました。

金窪敏知氏がお持ちの資料によれば、私は昭和19年5月に陸地測量部の囑託に発令されているそうです。辞令も戴いた記憶も残っていませんが、実際は同年1月中旬から出勤し、教室でセミナー(ゼミ)のある月曜を除き、火・木の終日及び金・土の午前中と、ほぼ隔日に、週の半分を陸測に振り充てた時間割が残っています。その頃の陸測では、昼に給食(という言葉はまだ無かった?)があり、各人に食パン半斤^{きん}が特配されました。民間では米の配給が痩せ細り、半ばは諸・小麦粉・大豆糟などの代用食。一升瓶での悲しい家庭精白がはやり、電気製パン器・煙草紙巻器などが発明・発売されたのもこの頃です¹⁷⁾。

半斤とはいえ、大人の一食分に相当する量の食パンはまたとなく貴重な品でしたが、金曜・土曜の午前を陸測勤務としたのは、食パンに釣られてと云うよりも、金曜午後は教室の会議や会合、半ドン¹⁸⁾の土曜午後にも、毎月各1回、日本地理学会の常務評議員会と例会(研究発表会)が開かれる決まりがあったからです。大学・学会の仕事はとかく「午後~夜型」なので、時には他の曜日でも、午前陸測、午後教室と、掛持ちしたものでした。

当時の陸測では、作戦・占領地域の拡大につれ、空中写真図化・既製図修正などの作業量も膨大となり、出征や外地派遣で減少する一方のベテラン部員の穴を埋めるべく、高等小学校(小学校高等科)卒業程度の少年らが動員され、大部屋で、地類区分や実体鏡下の等

高線描画などに従っていました。20名ほどもいたでしょうか。教育部・養成所の生徒らだったのかも知れません。そうした初心者への教材をも兼ねて、写真上の地形・地物を正しく読むための手引、「判読資料」を整備したい。これが武田班長の考えで、私も大いに張り切ったのです。収集済みの写真には、ジャワ派遣軍の押収物らしい四万分一写真(正しくは印画の上手なコピー)も20枚か30枚ほどもあって、うち数枚には、蘭印石油会社の主導で実施された植生・地質判読(Photo-geology)の証跡、白インクの記号と境界線とが描かれていました。K.Trollの有名な論文¹⁹⁾にも引かれた、その原資料です。また、日本軍撮影のマレー半島東岸の一部や、隆起珊瑚礁ビアク島の断片的な数枚、さらにはなぜか、サンギヘ諸島(セレベス島北方の火山群島)なども含まれていました。

当時、仏印との国境地帯や雲南などの辺境を対象としては、なお中国製十万分一図(地形・地物が隣接図に全くつながらない無責任な代物も少なくなかった)の修正・補足作業が続いていたようで、それら地域の写真を手に取れる機会は、ほぼ全くありませんでしたが、華北・華中に関しては、かなりな量の使用済み写真と標定図とが、判読班の戸棚に収まっていた。これらから、私らの知識・常識で読める限りの「資料」を選択して写真つい対(実体視出来る一対の写真)の形に切り取り、簡単な説明と共にブックに纏める。これが仕事の主な内容で、標定図からコース・ナンバーを指定すれば焼増ししても貰える、由でしたが、在庫(?)品の判読処理だけで、もう手一杯の状態。

一方、図化作業現場からの質問・宿題(これらへの対応が、「判読班」本来の役目だったのかも知れない)もあって、地誌的知識と勉強の不足を痛感させられもしました。類推による、正確に言えば「^{あてずっぽう}当て推量」での誤判読も幾つかあり、中でも、塩田を養魚池と見立てた件では、最も痛い思いをしました。黄河下流のデルタ海岸で、それぞれが隅に小屋を持つ池状の水面が多数連続密集して分布する写真を持ち込まれ、全く見当もつかず、形や規模に違いがあるものの、台湾西岸や、大陸の南支那海沿岸でよく見られる「養魚池」の類かも知れない、と判断、いや憶測して、ハテナマーク付きながらもその旨を回答したのですが、後日、「あれは塩田ではありませんか?」と、これは華北在勤経験をお

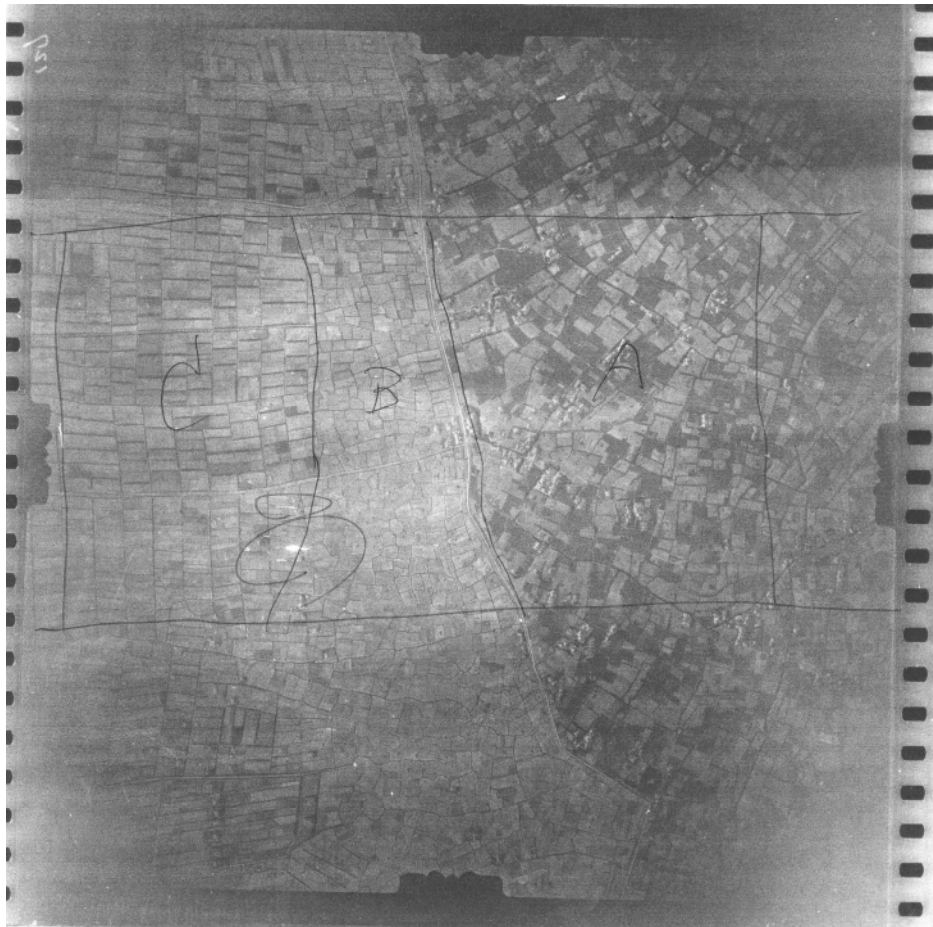


図1 上海付近「南匯」のクリーク地帯の測量用垂直写真

- A: 作物が育っている区画(黒っぽい部分)が多い。人家も多い。
 B: 未だ作付けられていない裸の耕地。区画が細かくて形が乱雑。人家がない。
 C: Bと似ているが、区画整理が進んで方形区割。
 (こんなに分かれる理由は、多分土地的条件。)

注1) A部を含めて、写真上で道路のように見える黒い直線群は、実際は水路。この写真でBとCの境界線上に白斑が見えるが、それは水面に太陽が反射してきたもの。他の写真では、A部の黒線も同じ反応を示しているの、やはり水路(クリーク)であることがわかる。

注2) 昭和7年の「上海事変」の頃「作られ、以降も大流行した軍国歌謡『父よ貴方は強かった』(が題名かと思っていましたがちょっと怪しい)に「胸が浸かるクリーク」と詠み込まれたお陰で、国内の地理教師の間にも一時「佐賀平野のクリーク(有明海北部干拓地の灌漑[用・排水路]が大流行しましたが、その本場、上海付近は「南匯」の「クリーク」地帯の測量用垂直写真。現上海市域の南東端を占める南匯区が「南匯」に当るようですが、簡体字との対比がはっきりせず、正確にはまだ不明です。

持ちの方からの連絡。拘わるほどの活券があるで無し、正直に「不明」と答えれば済むものを、現地を知らずに「^{メクラパン}盲判」読とは僭越にしてお作法にも背く行為、と恥じ入ったのでした。

もっとも、こんな藪眺めのミスばかりでもなく、等高線描画の「旧来の陋習(?)」を破って感謝されたこともあります。学部学生のころ、表紙に陸地測量部が参謀本部かの文字がある測量と地図作成の『教程』を目にする機会がありました(今も所有の筈ながら所在不

明)。その中に、地形線に関して、用語は忘れましたが「三方分岐(三分岐)の法則(?)」が述べられていました。どんな複雑な地形でも、山線(凸線)は三分岐の複合に解体できる(から、そのようにして等高線を描くべし!)と云うものです。ところが、教程に忠実なあまりか、中国で広東・広西・雲南・貴州など、また南方の占領地域にはとくに多い、筍や団子のような形の山地には、「等高線を描けない!」との悲鳴が上がったのでした。眼下に光学的立体像が見えているにも拘わら



図2 昭和15年9月撮影の偵察用斜写真(江蘇省睢陽県)
(昭和15年9月12日10時撮影の斜写真 高度1200m F25cm)

注1) 独17(部隊名のことか)

注2) 淮(ホワイ)河が洪沢(ホンツォー)湖へ入るところ、その南岸に位置する河港。

注3) 昭和15年9月撮影の偵察用斜写真(江蘇省睢陽県。市街と禿山とのコントラストや、砂州か防波堤?にまで人家が連なっているのが、如何にもシナ的です。それにしてもこの時期に、いったい何の必要があつての撮影か?)。

ず、多分は無意識的にも、地形線を引かなくては、と苦心苦悩の末なのでしょう。「石灰岩などの溶蝕地形には、三分岐の法則は通用しない場合がある。立体像の見えるがままに等高線を引いて構わないし、そうすべきです。」と回答して呪縛(は大袈裟!)を解き、安心と喜びの声が返って来たのでした。土地利用にも、例えば「浮稲栽培地」のように、季節に応じて姿を換え、乾田・湿田・沼田の何れにも該当しないが、また何れにも該当する地類は、どう表現したら良いか、などと、南方地域の写真図化作業では、判読の守備範囲を超える課題にも出逢ったものです。

「判読資料」の素材が多いうえに、現場からの質問や依頼もあり、隔日勤務では捌き切れず、宿題お持ち帰りの日々も増えました。そこで、武田班長に助手の採用をお願いし、後期生の山崎喜陽君²⁰⁾をアルバイトに雇って貰い、判読班に地理屋不在の時間が少なくなるように、二人の勤務をなるべく交互の時間帯に調整しました。年度が替わって間も無い、たぶん4月末

か5月初旬の頃です。

当時、判読班の戸棚にあった写真のほとんどは、「ツァイスの十センチ広角」(RMK10/18型²¹⁾)で撮影されたものでした。4,000メートルの高度から7.2km四方の四万分一写真が撮れます。十万分一地形図の修正や迅速作図には充分な縮尺でしょう。画角94°、画面対角線の長さは25cmを超えますが、凸・凹+凹・凸の単純なレンズ構成にも拘わらず、四隅を除くと、判読用にも十分満足出来るシャープな像を結び、隅部の甘さも、規定の撮影重複率が保たれている限りは、問題にならない程度でした。

1932年生まれの同じく「ツァイスの二十センチ」(RMK20/30型)には、より大縮尺な写真を、または、より高い高度からより広い範囲を撮影出来る利点がありますが、当時の陸測でその写真を目にしたことは、ほとんどありません。ただ満航では、森林・地籍・塩田などの台帳整備に、この「二十センチ広角」による大縮尺図を活用していた由です。また、当時多数存在し

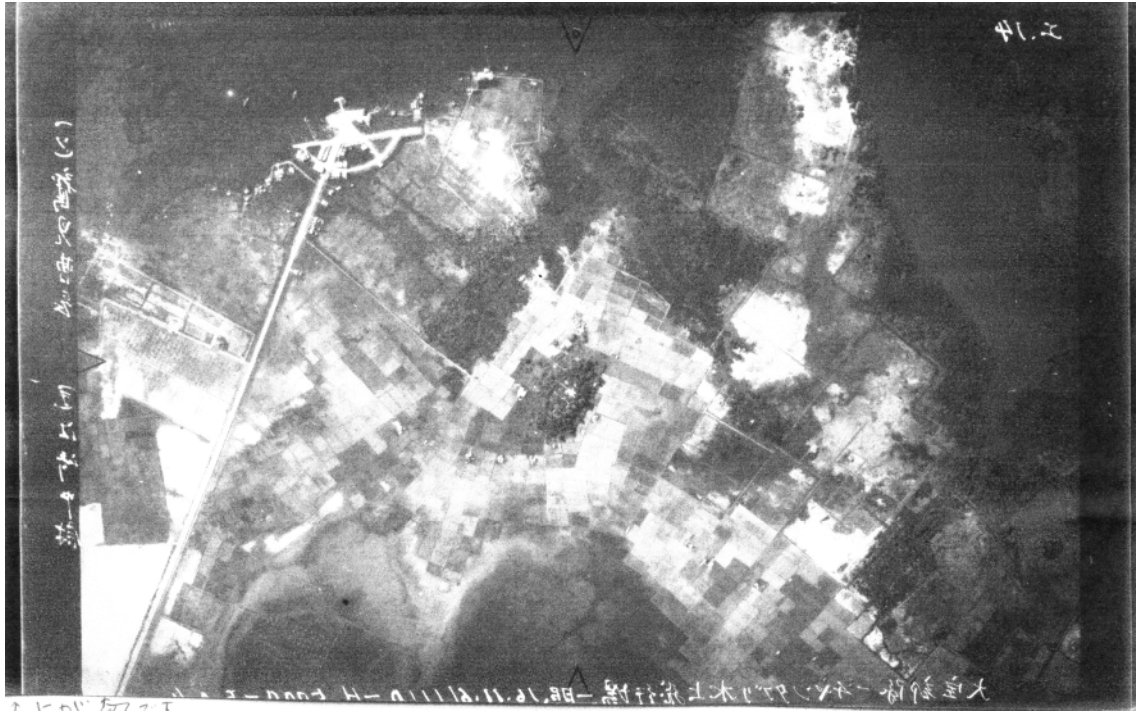


図3 チャンタブリ水上飛行場
(昭16・11・6 11:10 撮影 H5000 F.04)

- 注1) 真上が南。
 注2) (ノ)は操縦者鷺見曹長。(テ)は偵察(シでは写真撮影)者江崎中尉。
 注3) 半月状部分が飛行場で水面上に作られている。弦に当たる直線部分が滑走路。弧状部は誘導路。
 注4) 原稿こちょっと書き込んでしまった「チャンタブリ(タイ南東岸、カンボジア領に近いところ)飛行場」の垂直写真(立体視できる片割れもありますが、浮出し効果はあまり大きくないので略)。

た筈の、一号自動航空写真機²²⁾またはK-8によると判断される18cm×24cmの写真は、なぜか、ごく少数を目にしたのみでした。

なお、後記の特殊事情で入手した写真の中に、13cm×18cm(実画面寸法は12.7cm×17.8cm)の垂直写真が数枚あります。画面外縁の書込みによれば、大室部隊が開戦の約1カ月前に撮影した偵察写真らしく、重複度が小さくて図化には不適。操縦・撮影の人名や「バタンバン」「チャンタブリ水上飛行場」(図3)などの地名に加え、H.5.000-F.0.4の文字も見えるので、焦点距離40cmのレンズ(普通には、焦点距離には小文字のfを使い、大文字のFは明るさを指す)が使われているようです。それまでは、陸測でこのサイズの写真を目にしたことが無く、詳細は不明²³⁾ながら、f.0.4m、飛行高度5,000mとしての縮尺は一万二千五百分一。撮影された滑走路の長さが僅かに250mしかない計算になるので、ちょっと不審でもあるのですが・・・

昭和19年の4月には、勤労働員や旅行制限の実施など、切迫した空気が広がり、理学部でも翌月から空襲・

防火対策の宿直と休日直を始めました。当番は若手の助教授・専任講師・助手以下特研生にまで及びましたが、何度か発令された警戒警報がいつも空報で、夏休み前には、前期生必修の野外巡検を2泊3日で実施などの余裕もありました。

ただ、一般には秘匿されましたが、6月に北九州が空襲を受けていました。中国の非占領地からの飛来、と推定されたものです。防空演習は、日中戦争の頃からしばしば行われましたが、灯火管制やバケツリレーの訓練をも含めて、云わば戦意高揚のお祭り。防空意識が真に高まるのは、17年4月18日(土)の東京・中京・阪神地区への本土初空襲²⁴⁾以降、と言えるでしょう。しかし、見当違いな行過ぎもあって、夜間の屋外喫煙禁止もさること、白壁に月光反射防止の墨や泥を塗らせる、などに至っては笑止。また強制が流行か、建造物へのカムフラージュ(迷彩)塗装も随所で行われましたが、武田氏はかねてから、軍需工場などに迷彩を施すのは愚の骨頂、と主張していました。写真实体視によって、むしろその重要性を教えるようなもの、

だったからです。

迷彩とは別の意味ながら、天然色写真²⁵⁾が利用出来れば、判読の実効性も大幅に向上出来るのだが、と、よく語り合ったものです。ハリウッドで、それまでの人工着色ではない真正天然色映画を作ったとか作るとかの噂は、開戦前から伝わっていたことでした。色付きでなくとも、せめて赤外写真との対比が出来れば、とか、フィルターを淡黄色・橙赤色と交互に転換して撮影するメカを考案しては、とか、いろいろな夢物語もしましたが、結局は、当面の任務は与えられた写真で可能な限りの仕事をする！と、これはまあ、状況から当然の帰結でもありました。それでも、フィルター効果などの野外検証をしようと、登戸付近まで泊まりがけで出掛けたこともあったのです。

6月にはまた、米軍が圧倒的な戦力でサイパン島に上陸。狙いは本土攻撃への飛行場構築、と聞きましたが、それでもなお、五千キロも離れたマリアナから日本本土まで、爆弾を抱えて往復できる足の長い爆撃機が出来ていたとは、想像すらしませんでした。しかし僅か三ヶ月ほどの後に事態は急変。B29少数(1~2)機による偵察飛行が日常化して、昼夜を分かたず警戒警報や空襲警報の発令。昼の飛来では四発の大形機が小豆粒大にしか見えませんでしたから、日本の戦闘機の上昇能力をはるかに超える、八千メートルかそれ以上の高高度飛行だったのでしょう。黒く、時に銀色に輝く機体が、大空の半ばにも及ぶ長い長い筋雲を曳き、悠然と飛んで行くのをただ眺めるばかりの放心。「飛行機雲」なる現象を見、言葉を知ったのも、これが初めてでした。

戦後、民間にも利用を許された四万分之一(または一万六千分之一)の「米軍写真」は、占領後にB24で撮影されたもので、トポゴンを模倣したメトロゴンレンズ付きのK-17カメラ、撮影高度六千メートルの由²⁶⁾ですから、戦中の偵察用には、焦点距離20~40cm、またはそれ以上のレンズも使われたと思われます。秋口に武田班長の姿が見えなくなり、南方へ出張、と聞きましたが、新班長の着任で、単なる出張ではないと知りました。戦後に伺ったところでは、出向先は仏印のベトナムであった由。然し、任務の内容は話されませんでした。

空襲の本格化と二つの講演会

19年10月頃から偵察飛行の機数や頻度が増し、やがて爆撃も開始。当初は、偵察に来たついでに爆弾も落とそう、程度の、高空からの小規模な盲爆^{もうばく}で、被害も小範囲に止まっていたが、大晦日夜から元朝にかけての盛り場をねらった間欠的焼夷弾攻撃のように、嫌がらせ的(?)威力誇示もあり、さらには数十機の集団での来襲と本格化し、戦法も、数百メートルの低空からの絨毯爆撃。爆弾・焼夷弾の無差別集中投下にと変わりました。日本軍の反撃力は大幅に低下していて、高射砲は無効。戦闘機の数も敵機の数分の一。果敢な体当たりも届かず、空しく撃墜される姿に歯噛みしたものです²⁷⁾。

この間、20年1月27日(土)午後には、上野の学士院で「太平洋学術研究委員会」の講演会が開かれ、石橋五郎・辻村太郎・長谷部言人^{ことんど}の3先生が予定されていました。辻村先生の演題は「風食三稜石の分布」で、サンプル運搬係として私がお供。会場は、座席数30~40前後の講義室のような部屋で、東面する広いガラス窓の上部はステンドグラスで飾られていました。辻村・長谷部両先生のお話が終わり、石橋先生が立ち上がりかけたその時、轟音とともに窓ガラスが部屋中に飛散。2時を回って間もない頃、だったと思います。空襲警報のサイレンは聞こえていましたが、毎度のこと、と無視したのも。これで石橋先生の講演はお流れ、散会。帰途に、上野駅にでも被弾か?と大陸橋(両大師橋)に回ってみると、京浜東北線に沿う公園側石垣の下部が、数メートルほどの幅と高さ^{えく}で抉れていました。もし十メートルも北に、石垣の上面にでも落ちれば、講演や聴講の先生方も、恐らくは大勢が被災死傷。ただ、手帳のメモは爆撃に触れず、犬八昔カラ犬デ狼ヲ飼ヒ馴ラシタモノト八考ヘラレヌと、長谷部先生のお言葉だけ。古人類遺跡に併存・発掘される獣骨の解剖学的所見が、講演の主題だったようです。

この後、恐らく2月中(または下)旬頃に、もうひとつの講演会が、市ヶ谷の参謀本部で開かれました。経緯不明ながら、十年以上も前から陸軍予科士官学校教授でもあった、当時文部省図書監修官の渡辺光^{あきら}陸測資源研嘱託が、多田文男東京帝大助教授兼資源研所員を語らって推進、実現したのも、と私は憶測しています²⁸⁻²⁹⁾。お二人は、19年末に丸の内ホテルで開催され

た、外務省「中国調査会」設立の地理の委員でもありました（「渡辺正氏資料」）が、渡辺光先生の性格と情報網とから、こんな手緩いことをやっている段階ではないと判断・行動されたものと思われます。講演内容には、本土防衛に地理学の知識が有用なことを参謀らに悟らせよう、との意図が強く反映していました。

演者は地理学界の双璧、東京文理科大学（筑波大学の前身）教授田中啓爾・東京帝国大学教授辻村太郎のお二人で、田中先生には町田貞氏他1名ほどが、辻村先生には私がお供しました。メモを怠って日時不明になりましたが、穏やかに晴れた日の午後で、会場は参謀本部の講堂（将校集会所の由）、聴衆は、参謀肩章を付けた30名内外でした。田中先生の講演は、長年の御研究の成果の一端、盆地と海岸を結ぶ『塩の道』に関するもので、本土決戦に際してはそれらの間道を活用すべし、との要旨であったと思います。日本地理学会の大会でも何度かお聞きしたお声ながら、此处では、張り扇が欲しくなるような名調子で立て板に豆。思わず、「講義はいつもあんなですか？」と町田さんに伺うと、笑顔半分で「ええ、大体は・・・」。一方、辻村先生のお話は『飛行場立地と地形』と題し、西太平洋の島嶼を中心に、その他地域にも及ぶものでしたが、この年度には、「戦争地理学」と題する講話とゼミを折衷したような駒（単位外）が開設されていましたから、そこで耳慣れた話材でもありました。後日、若い参謀将校から「とても有益有用なお話を承り・・・」と挨拶され、嬉しくも揶揄ったく感じた記憶だけが残っています。

3月10日「陸軍記念日」未明の、東京東半部に対する爆弾・焼夷弾攻撃は、本格的広域無差別都市攻撃（非戦闘員殺戮）の始まりでした。原爆投下も、この思惟・精神の延長線上にあるものでしょう。その頃は、陸測も疎開の準備などで浮足立ち、登庁しても仕事にならず、週に4日は大学に詰めていました。9日（金）は教室の暗室で青写真用の薬品を調合していましたが、春何番どころではない烈風が吹き荒んで廊下のガラス窓を鳴らし、日が落ちても収まらず。深夜の空襲警報発令にも、それまでに無く不吉な予感を覚えたのでした。当時、私は、東武東上線の練馬駅近くに住んでいましたが、此处は武蔵野台地の東端に近く、深夜から払暁にわたる下町への大空襲は、外周の環状焼夷攻撃による開始から中心に三段のキノコ雲が重なる終焉まで、

その終始に目を奪われ、時を忘れました。

魔の夜も明けた10日は宿直当番で、ほとんど不眠のまま大学へ向かいましたが、山手線駒込駅の北側にあった市電車庫が全焼し、架線も切れぎれで、19番線（王子駅～駒込～本郷～神田～日本橋～新橋駅）は当然不通。火照りや燻りが残る焼野原の彼方に、揺らめく安田講堂の時計台を望み見ながら、学生ら数人と岩槻街道（本郷通り）を歩きました。以前から学内には、「大学と西片・弥生の学者町は攻撃されない」噂がありましたけれど、沿道の被災地と非被災地とが、ほぼその通りに分かれているのが却って不気味。手帳には「未明 B29一三〇機来襲、本郷以東焼野原トナル。懐徳館、歯科病室等焼失。罹災者百二十万、死者六万」とあります。数字は当座の大本営発表でしょう。地理学教室のある理学部二号館は、大学敷地の南西端に位置し、その東側の、広い和風庭園に囲まれた木造三階建の明治洋館が懐徳館で、大学の迎賓館になっていました。二号館の屋上にも油脂焼夷弾のジュラルミン筒³⁰⁾が何本も転がっていましたから、木造であれば当然焼失の運命。投弾限界が少し北側にずれたのかも知れません。なお戦後、時を経て、元懐徳館の敷地には総長公舎（新迎賓館）と理学部資料館（東大博物館の前身）が建てられました。

手帳にはこの後、12日未明名古屋一三〇機、14日大阪九〇機、17日神戸六〇機、18日九州艦載機一、四〇〇機、などとありますが、19日の、機数も無し「名古屋来襲」以後は、ずっと空白。250キロ弾の爆風で我が家が小破し、焼夷弾では隣家まで焼かれた4月20日も、被災地が山手線の西側まで広がった5月27日「海軍記念日」の大空襲にも、全く触れるところがありません。されるがままの蹂躪に、根も愛想も尽き果てていたのでしょう。

教室と陸地測量部の疎開

高齢者などの自由疎開は17年頃からですが、次いで学童の「集団疎開」が規模を拡大。爆弾が落ち始めた19年末からは、大学・官庁も疎開³¹⁾を検討し始めました。地理学教室でも、鉄骨三階建の二階にあるから爆弾が落ちて大丈夫、などとの根拠の薄い楽観を3月の大空襲で反省し、取り敢えずはと、貴重図書を山中湖に近い木内家の別荘に疎開発送。また6月に入

って、前期生と和書の一部を、長野県諏訪郡茅野町(茅野市)北郊、玉川村荒神の寺坊に疎開させました。19年10月入学のクラスで、後の、お茶の水女子大学教授浅海重夫、国土地理院院長高崎正義、東大教養学部教授西川治ら諸氏のタマゴ時代です。助手と特研生が一週間乃至十日の交替で出張して実習・巡検などを行う計画はありました(実施もした!)が、この学期の講義はお預けです。皮肉にもこの頃には、四大工業地帯への大規模空襲は終結して、対象は地方都市に移っていました。

一方、陸地測量部は、参本のお膝下だけに、下町大空襲以前から二段構えの計画を練っていたようで、私も3月19日に登庁して判読写真類を整理・梱包。月末か4月初めには、世田谷の「明治大学予科和泉校舎を接收して移転」の通知が来て、2度ほども訪問しましたが、ここは仮の宿り、落ち行く先は信州路!とかで、ろくに解梱もせず、存在意義の無くなった判読班の存続が廃止かさえも曖昧。出張用にと、学割証にも似た軍務旅行証明書(正式名は忘失)数枚を頂戴しただけで戻りました。19年度から旅客列車の削減と旅行制限が強まり、乗車区間100km以上の長距離乗車券の購入には区長または警察署長の「旅行証明」³²⁾が必要と、手間暇が掛かるようになっていたのです。軍の証明書のお蔭で切符入手はかなり楽になりましたが、青切符(二等乗車券)で料金倍額(20年度からは3倍)には閉口。兵卒以外の軍人・軍属には「品位保持」が必要とかの理屈で、三等車(今の普通車)には乗らない建前があったのです。もっとも、旅費支給があるでなし、背広に中折帽³³⁾の若造にはこちらが相当と、結局、無駄金は使いませんでした。

なお手帳には、「フィルム所要ノ分借出器材班ニテ披見ノコト」の文字も見えます。凶化作業済みのフィルムは、器材班にとって処置すらも面倒な厄介物だったのでしょう。数ヵ月後には、地域は何処でも適当に、ロールの数本も借り出して置けば良かった!と後悔する事態に。また、「安曇郡穂高村」や「明科町穂高」とは別に、玉川村の疎開先と並べて「安曇郡明盛村温明国民学校気付」とあり、当時の地形図で調べても、駅や道路と同校の関係位置が記憶に合致しているので、地図センターでの研究会で話した「判読班の疎開先は穂高村」は大間違い、とはっきりしました³⁴⁾。

疎開先訪問の初回の日取りは、記録が無く不明確ですが、学生を送り出した次の週くらいに、新宿発着で、玉川村から陸測へと回りました。この時は諏訪湖の南の入笠山^{にゅうがさやま}に巡検し、杖突峠の茶屋でありついたトコロテンに学生諸君が大喜び。諏訪盆地が寒天の産地であること(地人相関論的教材になっていた)を確認出来たからでも、勿論ダイエットでもなく、それほど食糧事情が悪かったのです。

約一週間後に訪れた陸測では、武田班長時代から判読資料の作成・編纂用に整理した写真・関係地図の類を持ち帰る予定でしたが、移転早々で業務再開には遠く、まだ何処に何があるかも分からない状態。たまたま、私が陸測に足を運んだ当初から廃棄処分扱いになっていた代物、撮影重複率の不足・過剰などで使用出来なかった写真数十枚を発見し、鞆に入れました。お役所仕事とは云え、何でこんなものまでも運んで来たのか、と半ば呆れながら……。撮影場所も地名も詳しくは不明ながら、華中の十センチ広角写真と、一号自動によるらしい18cm×24cmの、これは恐らくマレー半島北部の写真です。既述の、18cm×13cmの偵察写真も、この中にありました。

今回の訪問は7月の予定でしたが、後記の事情で約1ヵ月遅れの8月2日に、各駅停車新宿23.00発の夜行で出発し、陸測に先行。これはメモにあります。今はほとんど姿を消した夜の鈍行列車も、学生らの貧乏旅行には大いに活用されたもので、戦前には乗客も少ないことから、クロス席ベンチシートの通路側を持ち上げて足駄や缶詰の缶を支い、快適なベッド(?)に変貌させる工夫(巡回の車掌には叱られる)も横行していました。

手帳には、判読資料・論文・山崎印鑑・米塩³⁵⁾・毛布・フィールド用品(地図・ハンマー・クリノメーター・写真機・スケッチ帳)の文字もあるので、毛布まで持参したようです。学校の宿直室にでも寄宿したのでしょうか。判読資料・論文とは、2ヵ月後に迫る特研生期(新制大学院の修士課程に相当)終了に備えたフォトジェオロジイの書きかけ原稿。さしずめ修論で、その充足に使える写真を探すが、正直に云って、今回の陸測訪問の主目的でした。印鑑は、アルバイトを継続出来なくなった山崎君への未払分給与を代理受領するためのもの。また米塩とは、自分用の飯米と、食い気盛りの

学生らへの差入食品の意味。米を持参しなくては旅宿にも泊まらない時代でした。

松本駅着は、翌朝7時半頃。大町行電車（松本～信濃大町は旧信濃鉄道で、早くから電化されていた）に乗り、たぶん10時前に到着した筈の陸測では、校庭で数人が焚火をしていました。近付いて見れば、驚いたことに、径2～3メートルほども掘った大穴に、ロールのままのフィルムと書類や地図の類とを、一緒くたに放り込んでいます。写真用フィルムは易燃性ながら、コーティングされたゼラチン膜が燃焼の継続を妨げるらしく、洋紙・地図紙が助燃剤の役をも担っているのです。舎内では、焼却するものとしなないものとの選別・仕分け作業。もちろん、平常業務など出来よう筈も雰囲気ありません。分類を見ていると、中国や南方諸地域の使用済み写真ネガと成果品が焼却対象、の模様でした。渡辺正氏によれば、地図・書類などの焼却命令は8月15日以前には出していない（駒澤大学での御発言）由ですが、独断専行は関東軍以来（？）の御家芸。そうではないとしても、使用済みで不要になったフィルム・地図類の処置は、担当部局の判断と権限とで決定出来たでしょうから、この時期での焼却処分も、あなたが軍律違反ではなかったらと思います。

当日午後か翌日かに、再び焚火を訪れ、泡立ちながらじりじり燃えるフィルムのロールを、無力感を道連れに勿体なやと眺めていると、横に置かれた予備軍の中に、やはりロールにした地図の束が見えました。何げなく拵げると、かねて馴染みの仲だった中国十万分一図。そこでつい、焚火見張番の何方かに、これ、戴いて行っても構いませんネ、と。

ダメ、とは聞こえませんでしたから、この五円也を尊重³⁶⁾。

崩壊寸前の陸測には、1泊だけでの退散だったようです。玉川村では、お土産の「中国十万」を披露して読図の実習。6日、広島への「特殊爆弾」投下を知ったのは新聞紙上、と永らく思っていたのですが、第一報はたぶん、お寺のラジオだったのでしょう。9日には霧ヶ峰に登り、大学航空連盟（？）のグライダー訓練をも眺めた記憶がありますが、これは別の時だったかも知れません。上諏訪に降り、汽車で茅野へ帰る途中の新聞で、ソ連参戦（8日）と長崎被爆（9日）を知ったのでは？とも。

「特殊爆弾」は原子爆弾、と、これはすぐに推測出来ました。日本でも理化学研究所の仁科博士を中心に研究が進められていることは、かなり広く知られていましたし、また、「マッチ箱大」のウランの塊で、東京全部が吹っ飛ぶ、などの解説記事も目にしたものです。然し地学者の間には、資源量から見ても日本には無理、の声もありました。いずれにしても、これで万事終結。当世なら電話で教室と相談、の事態ながら、なお「本土決戦」の声もあるし、何よりも、急いで焼跡に帰っても宿さえ無いだらう、と疎開は当分継続に合議一決³⁷⁾。私もさらに数日を玉川村に滞在し、13日（日）の例によって夜行各停に乗りました。新宿着定時は4時半頃で、少々早すぎるが・・・、と思ったのが、甲府への空襲中とかで長坂～葦崎間に何度も緊急停車。新宿には2時間程も延着して好都合な時間帯。後日の調べでは、終戦前夜の不運な被災都市は熊谷かどこかで、不運に差は無いものの、甲府の被爆焼失は数日前だったようです。艦載機でも来襲していたのでしょうか？

翌15日の「玉音放送」は、よく聞き取れなかった、の声が多かったようですが、埼玉のアンテナにも近い我が家では、ポータブル録音機の雑音は混じるものの、天皇のお言葉は、はっきりと聞こえました。ただ、これが宮中の話し方？と、遅きに失したポツダム宣言受諾の内容よりも、耳慣れないアクセントに気を取られたものです。それに、いまさらの悔しさ、よりは、これで今夜から服を脱いで眠れる！の安堵。市民はこの半年、夜中何時でも飛び出せるように、衣服を纏ったまま寝に就いていたのです。

これから十日ほども経ち、小諸在の岩村田に疎開中の親戚を見舞ったついでに25日（土）に、最後の「陸測訪問」。看板が「内務省地理調査所」に変わる一週間前でした³⁸⁾。

そんな時期になっても、「焼却処分」はなお継続中で、フィルムが減ったせいなのか、火災は勢いを増し、天に沖していました。これが最後の資料漁り、とがらんどくに近い部屋を探り、新聞見開きよりもやや大きい厚紙布張りの^{たとう}畳紙を発見。これには、^{とくごう}徳本峠付近からC3Bで撮影した、槍穂高連峰の地上写真測量用写真とその図化成果品など、日本の写真測量の揺籃期を記念する、貴重な文化財が収められているのです³⁹⁾。

「これも処分するんですか？」「そうなるでしょう

ね」「では、戴いて参ります！」

要するに、陸測にさえ存在しなければ、誰も責任を負わずに済むのです。でも、真っ先に灰になった外国や占領地の写真や地図⁴⁰⁾はともかく、この時期になお、国内産品(?)までをも煙にしようとは……。戦国時代の「落城」の気分、だったのでしょうか。

大きくて重い「置紙」を抱えての気忙しい蜻蛉返り。この日、小諸を発ったのが払暁。帰りは篠ノ井駅を深夜の信越線各停、直江津発上野行。往復各2回の間乗換えと、同じく長い待合わせ時間。昔は我慢強かったことでした。山手線が走る時間帯に上野に着く夜の鈍行は、これより2時間近く前にも1本あるのですが、米原始発なので多客だろうと敬遠。然し、誰もが同じ発想をするらしく、直江津仕立ての列車でも、また土曜日なのに、車内には入れない鯨詰め超満員(19~21年頃には、窓から出入りする身軽な客も少なくなかった)。家族を疎開先に訪ね日曜を避けて帰京、の人も多かったでしょう。汚れたデッキに腰を下ろしステップに足、手摺に縋っての約7時間。居眠りで転落しないようにと、後ろの人が肩口を押さえてくれていました。見知らずながら、共に同士の敗戦国民。

この前か後か、記憶も曖昧になりましたが、参謀本部から教室に電話があり、木内先生が対応されたのだったのでしょうか。居合わせた院生・学生ら数名と共に、放出地形図を頂戴に参上しました。外邦図の棚もあったようですが、どれでも好きなようにとのことで、方針とても立たないまま、各自が取り出し、めいめいに持てるだけを抱えて戻りました。全部で300枚前後はあったでしょう。一括して、写真暗室の隅の木炭置場に隠した、と云うのは、大学・研究所の地図類は接收対象、との噂があったからです。その後しばらくして、地下のドライエリアにある陸水学実験室に移しましたが、いつの間にやら行方不明。多田先生の指示で資源研に運んだ、と聞いたのは、一年か二年経ってからでした。

二つの^{あたばな}徒花

空襲本格化から敗戦までの間に、私が関与した軍関係の仕事が二つありました。先行は参謀本部での『第一次兵要地理調査研究会合』。これは、前出注28)の渡辺氏資料に詳しく⁴¹⁾、また参加地理学者の選考に関し

ては、注29)に述べたところです。

この研究会では、またその「報告」を纏めながらも、もはや、今の段階になってこんなことを……。と、掛声のみが勇ましい「本土決戦」の前途が暗く見えたものでした。でも、暗く見えた、などとは、まだ一縷の希望を残していた、のかも知れません。

文字通りのお先真っ暗は、6月半ば過ぎ、千葉市の歩兵学校で、兵卒の牛蒡剣⁴²⁾の鞘が割竹で作られているのを目にした時でした。日本刀の鞘も本来は木製ですし、理屈から言えば剣鞘が金属である必要性は低いでしょう。然し竹鞘の短剣は、鉄不足もここまで及んだか、と悲しくも哀れでした。訓練以外には使う必要の無かった刀身も、竹光だったかも知れません。砲車・戦車を置き去りに転進し、艦船を惜しみ無く沈めての3年余り。国中から鍋釜や鉄柵やが消え、ダイヤや鋼玉の類は研磨材に変身(とは大嘘の飛語も絶えなかった!)。働くべき兵器工場を失った動員学生・生徒らは、和紙とコンニャク糊の風船作り⁴³⁾や松根油(機関燃料)採取に精を出すしかなく、家庭には蓖麻栽培(ヒマシ油は潤滑油)を奨励、工場でも木製飛行機(電探に写らない新兵器!)の試作、と云う窮迫度ですから、いまさら驚くのが阿呆、だったのでしょう。

歩兵学校への出張は、同校教官角田大尉^{すみた}からの、地理学教室主任教授への依頼に依るもので、玉川村から戻った私と、次の特研生の吉川虎雄氏とが、偵察を命じられました。

歩兵学校としての判断か、角田大尉ら一部のそれなのかは尋ね損ねましたが、米軍の上陸地点を九十九里浜乃至房総半島と想定し、その対策を研究するのが目的でした。後年、渡辺正氏は信濃毎日新聞社の記者に、「相模湾が有力……。という私ら(参謀本部情報第二部兵要地理班)の判断も」「当時の地理学者を」「一週間に一回集めて」開いた「本土作戦研究委員会の研究成果の一つだった」(渡辺氏資料:120頁)と語っておられます。この「本土作戦云々会」とは、前述の「兵要地理調査研究会合」を指すものとしか推測され得ませんが、「上陸適地判断」は、重要課題になってはいたものの、短時間、しかも一度だけの研究会では十分な討議も出来ず、まして結論を得るなどには至らなかった、と記憶します。

相模湾一帯の砂丘は、九十九里浜ほか日本の一般的

な海岸砂丘とは違い、海岸線に斜行して分布するのが特色(かつては、東海道線の車窓からも観察出来た)で、潟湖跡の湿沼地も少なく、重車両の上陸・通過は容易。加えて海が深く、艦船の接近にも好都合です。まあ、誰が見ても関東随一の上陸戦適地。しかし、戦争・戦術には騙し合いの面もあるので、ここを選ぶか否かは、地形・地理とは別個の問題。研究会が成果として提出できるのは作戦の基礎資料に過ぎず、より以上の判断は、戦争の専門家が行うべきこと。歩兵学校または角田大尉らの予想が渡辺少佐らの判断と違って裏にも、それなりの理由があった筈です。また、米軍が正攻法で臨もうと考えていたとしても、それははや横綱と幕下の相撲。陸・海・空の悉く^{ことごと}に非力化した日本軍の戦力を見通した結果、だったのでしょう。米兵を含む百万の命を救った、などの原爆投下擁護論は、後付けの理屈に過ぎません。

熾烈な艦砲射撃と空爆で敵陣を壊滅した後に上陸する米軍を、員数・装備共に劣勢な日本軍が阻止することは到底不可能。そこで、歩兵学校案は窮余の奇策。上陸予想地付近に無数の「拠点」、密閉型蛸壘^{タココぼ}⁴⁴⁾を作って潜居し、上陸した敵の通過後に一斉に蜂起して、腹背から挟み撃ちにしようとの楠木正成流。サイパン・沖縄・硫黄島での経験と教訓を受けての立案のようでしたが、「拠点」に持ち込める武器はせいぜい機関銃くらいでしょうから、婦女子の竹槍よりはマシ、の程度。だいいち、戦力化可能な人員が、在郷軍人や我々学生を総動員しても、国内にどれだけ残っているものなのか。

円匙(スコップ)で掘れる程度の固さで崩れ難く、しかも上部の遮蔽が見破られ難い場所、となれば、第一の候補地は下総台地の林の中。ところが、拠点案最大の問題は、潜む人間とその排泄物の臭気を敵に嗅ぎ付けられないための手立て、なんだそうでした。米軍は多数の軍用犬を連れて来る由で、石灰洞の多い南方戦線ではごく当然の策でしょう。そんな拠点戦術に初めは、マトモなのか?と耳を信じ難い気分でしたが、「節を抜いた竹を木に添わせて立て、臭気を上空に排出する方法なども考えてはみたが・・・」と聞くに及んで、やはり本気なんだ、と得心。正気の沙汰では愚かしくとも、この期に及んでは、もはやヤルシカナイのです。万事は遅播きながら、出来るだけの協力をしよう、と

決心。

そこで、まずは地形と微気候、とくに風向・風力との関係の研究。と云っても、これはなかなかの難題です。野外実験が手っ取り早い、と稲毛や木更津海岸に出掛けて、地形や地表高に応じて変わる風の測定を試みました。手帳やノート、模式図などによれば、掘削可能地域分布図、植生と地質との関係、断面(穴)・写景図ヲ作ル、試掘適地選定、などの宿題があり、また、温度計・自記風向風速計などの観測機器のほか、長さ50cmの細長い紙片を50cm間隔で3ヵ所に付けた長さ2mの割竹20本を用意し、兵卒数名を使役して、面的・立体的な調査に役立てようと計画、したりもしています。

この野外実験は6月下旬頃のことですが、やがてドイツが分割占領され、こともあろうにソ連に和平仲介を依頼したことまでも漏れましたから、さすがに歩兵学校も戦意喪失。7月下旬の大貫海岸合宿では、角田大尉⁴⁵⁾・土屋中尉以下数名の下士官らと、専ら雀卓を囲んでの夜更かし、だけが記憶に残っています。

手元に、カドミウムイエローの表紙に、「昭和二十年五月大本営陸軍部」、また「極秘」とも印刷されたB6版小冊子があります。

参本での「兵要地理調査研究会合」の折に、参考資料にと配布(五月とあるので会合後に送付?)された『兵要地理調査参考諸元表(其ノ一)』(図4)で、内容は、航空作戦・対上陸作戦・地上作戦からなり、それぞれがまた三部、各2枚から5枚の図表の集成で、全部では二十九表。正誤表付きの速成冊子ですが、主として米軍の、兵器の性能と作戦傾向、飛行場・泊地・渡河点その他の設定規模・所要時間や、機動力・工事力、それらと気象・土地条件との関係の、欧州戦線をも含む従来例、などが盛られています⁴⁶⁾。

これらの表を覗くだけでも、本土決戦などとは蠅螂^{カマキリ}の斧、と自明。「天皇陛下の御国である日本を、我が国と呼ぶ非国民ら」(蓑田胸喜:「原理日本」誌所載文中の文言、昭和7年頃)などと極右の狂気が罷り通る世相も、日清・日露戦役の勝利を、独力で、精神力でか克ち取ったような錯覚を植え付けた「国民教育」が培ったものでしょう。

半時間に1本と気長な総武線電車の運転間隔と、稲毛駅までの夜道の遠さだけが難、としか感じませんでした。

こうして昭和22年5月、地理調査所東京支所(千代田区霞ヶ関2丁目人事院ビル内)で「日本写真測量学会」の創立発起人会を開いて会則起草などの準備を終え、翌6月7日午後、丸ノ内の小西六講堂で設立総会を開催。武藤勝彦会長(地理調査所長)、篠邦彦理事長以下、穎川・桑原・斎藤・佐藤・武田・中村・原・丸安その他の理事を選挙、木本・中山両名誉会員の推薦を行って正式に発足しました。ガリ版刷りで作る予定であった会員名簿が手元に見当たりませんので、当初の会員数は200から300の間ではなかったかと、これも不明確です。会員数の少なさによる印刷費の割高から、当初には隔月刊を予定した機関誌の発行も俛にならず、毎月の研究発表(例会開催)と不定期の講習会、夏期講座の開催などで凌ぎました。

職柄と経験との関係から、広報、会員募集、行事・講演依頼等は武田氏、編集、出版関係が私と、自然に役割分担が出来てそれぞれに腐心しましたが、絶対的にも小さい写真測量関係者数を考えると、早く機関誌を刊行して世の関心を誘うことの必要性が極めて大、と考えられました。ただ、戦中以来の印刷用紙の不足がなおも続いていて、闇市場の紙価は高騰の一途。地理学会もそうでしたが、新生の小学会では資金不足が深刻でした。昭和23年度の初めには、文部省科学研究所に足を運んで出版助成金の交付を陳情。

念願の『写真測量』誌第1巻第1号⁴⁷⁾を世に出せたのは、学会発足の約1年後、23年夏(表紙には5月とあるが実際は7月)のことでした。初号は共同印刷に頼んで最小限部数の500部を刷り、会員外にも撒布したのです。その後、次号刊行まで13ヵ月を要するなど、その歩みは順調とは言い難く⁴⁸⁾、代わりに、月例会その他の行事を絶やさぬよう、出来るだけ継続的に活動を展開することにしました。

雑誌発行が不順であった一因は、原稿の不足にもあります。世が落ち着き、調査研究に励む環境が整ってくるにつれて会誌への投稿が減る、と云う、発足時の想定とは全く反対な現象が現れて、戸惑ったものです。官庁・会社にそれぞれの研究誌・広報紙の類⁴⁹⁾が誕生し、例会での口頭発表は認められても、活字での公表

は社内誌優先、の掟が暗黙裡にも発生していたことが、その主な原因らしく見えました。また、プライオリティの問題が無い研究でも、或いはそれをクリアした場合でも、同じような内容の文章を再度活字化することには二の足を踏む人が多かったため、でもあったようです。二重投稿は論外としても、このような問題は、教員主体の地理学会の運営からは想像も出来なかったことで、対策の立てようも無いままに、時間ばかりが過ぎました。

「写真測量」誌の他に、啓蒙・宣伝・教育の手段として「写真測量叢書」の発行をも企て、23年12月から28年5月までの間に4冊を刊行⁵⁰⁾。私がデザインした学会のマークも採用して戴き、初めB6版での^{こごご}怖々のスタートが、好評を得て2冊目以降はハードカバーA5版に定着。これらだけは、発売所に迷惑を掛けずに発行出来ました。

昭和27年度には国際写真測量学会に加盟しましたが、原稿不足に重なる経費難で機関誌発行が意に任せず、また多田先生が教室主任になられて以後は、国有財産の管理責任上止むを得ないことながら、それまで研究発表の場に充てていた理学部地理学科の講義室が借用し難くなりました。以後は、森林記念会館を借りて国際学会への出席会員の報告会などを数回行ったのみで、学会活動も悉く休止に近い状態に。そこで、27年度を休会扱いとして会費その他を28年度に持ち越すこと(通信総会により理事長も武田氏に交替)に決定。また、会誌も謄写印刷(表紙は活版)に戻し、B5判に近い寸法で第3巻、第3・4号、64頁を28年12月に発行し、結果として、これが最終号になりました。

その頃は、地理調査所はなお黒砂町にあったものの、国家経済の回復に伴って、所員の多くは別に居を構えて通勤するのが常態。延いては学会運営の相談も、月一回の定例理事会の場に限られがちとなり、従来のような自由な意志疎通や臨機の対応が出来難くもなっていました。一方、大蔵省と文部省は、「学会誌出版補助金」を打ち切るため再度の学会統合を企てており、その後の実績が無く出版補助金を申請してもいない日本写真測量学会にも、日本測地学会(昭和29年設立)への合流が強く慫慂されました。会長が同一人であることも、大きな理由になったようです。

時の流れには逆らえず、勸奨に従うことに決めたの

は昭和31年⁵¹⁾。28年度以降は機関誌も記録も無く、その間にどんな活動をしたか、休眠状態が続いたのか、などは全く不明になりましたが、新年度の会費を測地学会に送らなければ自然退会扱いになる、旨の文書を会員に送ったようにも思うので、合流は年度の切替時だったようです。私は測地学会には入会しなかったで、その中で写真測量の研究がどのように進められ、どんな論文が機関誌に掲載されたかの知識もありません。

ただ数年後には、測地学会の中で再び「日本写真測量学会」設立の機運が高まり、昭和37年に実現して「写真測量」誌が季刊で復刊されました。誘われて今度は私も入会しましたが、時代はすでに人工衛星によるリモートセンシングの入口で、貧乏教室のスタッフには出る幕も無く、それに、関心と手間が昭和33(1958)年から始まった中央アンデスの現地調査⁵²⁾に注がれるようになってしまいましたので、二年か三年ほどで退会しました。

この新旧二つの「日本写真測量学会」は、第一次・第二次を冠して区別されています。すでに半世紀をも越える昔^{むかしごと}事で、第一次時代を共に闘った先輩も仲間も、ほとんどが別世界の住人となりました。振り返れば、当時の情熱が懐かしく、また輝いて偲ばれます。(了)

注

- 1) 前回記事でプフォルとしたのは筆者の誤記。また前回(『外邦図研究ニュースレター』3)脚注26の「千屯級」は7千屯級の脱字であった。プラフィ川上流地帯の調査日時にも幾つか記憶違いがあるが、それらについてはお許し願うことにしたい。
- 2) 『外邦図研究ニュースレター』3、67頁、脚注28。
- 3) 戦前の「郵便はがき」の値段(開戦後は3銭に値上がり)、召集令状が葉書で送達されることから、「1銭5厘の命」とか、兵隊ほど安い(安上がりな)ものは無い、などと自嘲的に使われた。ちなみに、大東亜戦中の死亡賜金(戦没者への恩賜金)も、二等兵の150円に対し、戦闘を主導し兵卒の命をも預かる将校は、最下級の少尉でも3倍弱、大将に至っては15倍近い高額と、大差があった。恩賜金と称しても元は国民の税金である。
- 4) 「他山の石」をもじった駄洒落で、安はまた案。内容の大

半は、例えば、博物館員のI隊員が種の無いところにも論争の火を燃やす話、女子大学T隊員の幼稚な挙措、同じくT隊員へのN隊員の反目と暴行etc.の、調査隊で見聞した各種ウラバナシ的記録集。なお、所持品検査場は、ピンポン台を数列も連ねた雨天体操場のような趣で、各自が台上に携行荷物を広げて別室へ移動し、留守中に係官らが検査するアンフェアな仕組み。場内には拡声器から卑猥極まる唄がガンガン流れていた。第一次大戦時の女間諜^{るばい}、マタハリとの連想から、「マタハーリヌツンドウラカヌシャーマヨ」のリフレーンが耳に残り、後年、民謡ユンタの替え歌と知ったが、これが慰労のつもりとすれば、帰還者も沖縄も、とことん愚弄されたものではある。

- 5) 疫病入国阻止の措置か、とも考えたが、第三班員が乗船帰国した貨客船は宇品に直行し、即日陸が許されている。単なる順番待ちとも考え難いので、或いは「敗残兵」の存在と関係があったのかも知れない。
- 6) 「至急電報」のこと。料金は高いが、定時の配達時刻を待たずに配達された。
- 7) 従来、理・工・医系の学生には、留年者を除き、大学卒業まで徴兵が猶予される恩典があったが、戦局の激化により廃止されていた。大学院生の一部に限ってそれを復活し、且つ給与を支給する、という大学院特別研究生制度が昭和18年度から発足し、「特権生」の別称もあった。戦後も数年間継続したが、実態は有給副手と同様で、助手に準ずる存在として、学生指導、教室や学会運営の雑事、などに従事させられることが多かった。
- 8) 甲・第一乙・第二乙・丙の四種あり、第二乙は入隊猶予、丙は不合格。
- 9) 新聞紙も同様で、19年3月には夕刊廃止。朝刊も、8頁建てになっていたと思う。
- 10) 活版印刷では、文選工が原稿に従って活字棚から活字を抜き取り(拾い)、それを植字工が、図版や写真版、また字間・行間を調節する「詰め物」などと共に、枠内に配列し(植え)て印刷版の型取りに廻す。印刷部数が数百程度と少ない場合には、このまま凸版印刷機に掛ける。活字は長さ数センチの細い立方体で、植字後の文字列に乱れがないように、活字の尻(文字面と反対の端面)には中央に溝が設けてある。活字が違っていたり必要な活字が揃っていなかったりすると、植字工は活字を逆向きに植える。校正刷では、これが太い二本線となり目につき易い。有名な俳句、「初雪や二の字二の字の下駄の跡」が「ゲタ」の語源、と

の説があった。確からしいが、真偽は未定。

11) 大塚地理学会は東京高等師範学校と東京文理科大学(現、筑波大学)の卒業生が主体となる学会で、小石川区(現、文京区西部)大塚に校舎があったことによる命名。当時、大塚・本郷は、東京文理大と東大の代名詞にもなっていた。地人書館は同会の機関誌『地理』の発行・発売所であった(『日本地理学会 75 年史特集号』地理学評論 73 巻 4 号、平成 12 年)らしいが、筆者が陪席した 19 年 3 月 24 日の日本地理学会常務評議員会では、雑誌統合の件と併せて、休刊する市販雑誌『地理教育』(?)の発売元、中興館への発売所変更をも検討している。なお、それまで『地理学評論』の発行・発売所であった古今書院は、社主橋本福松氏の死去と後継者の徴兵で、廃業の止むなきに至っていた。またその頃、用紙配給に絡めた圧力により、各学会とも、機関誌の「発行所」を書店から学会自身に変更した。

12) 木本氏房：航空写真測量と其の使命(科学知識, 科学知識普及会, 21 巻 11 号, 昭和 16 年 11 月)。これは同号「特集」記事の一つで、表紙にも表題があり、年末(?)頃にたまたま店頭で 1 冊だけ残っているのを見て手に取ったが、口絵にある筈の「照魔鏡のやうな航空写真」が見当たらず、落丁の残本か!と、立ち読みだけで購入せずに過ぎた。数ヵ月後に古書店で再会。その口絵写真にも「照魔鏡のやうな」だけが欠けていたので、検閲で削除されたものと^{おぼ}違播きながら気付き、罪滅ぼし(?)に購入した。操縦席を前に、エンジンとプロペラを後に置いた、ずん胴の「写真測量用低翼機」の写真が珍しい。

13) 陸地測量部は現在の千代田区隼町、国立劇場の辺にあった。本館は市ヶ谷に新築移転するまでの参謀本部で、明治調の銅板葺き三階建洋館。天井が高く、南東側中央には吹抜けアーケードをもつ車寄せが張り出し、宮殿のように豪華。本館正面の右前(南西)には、後代の増築らしい別棟があり、こちらは兵舎が学校のように簡素な二階建であった。明治 21(1888)年の陸地測量部創設に際しての建築かも知れない。教育部や製版・印刷関係部課の所在は忘れたが、総務課(の一部?)と現業第一・二・三課は、この別棟にあったように思う。これらの建物の南側は広い前庭で、南東隅の三宅坂交差点(正しくは分岐点で、ここから北に上る坂道の名が「三宅坂」)に近い位置に衛兵所付きの正門があった。この、元前庭跡に、現在は最高裁判所が建っている。青山通りも内堀通り(は無名だったと思う)も現在より狭く、しかし、共に市電が走っていた。青山通りでは、

昭和 17~18 年に建物強制疎開が行われ、これが戦後の本格的拡幅の先駆となった。なお、正門に程近い青山通りの南側には、地形図類の総元請、小林又七商店があった。土蔵を持つ純和風の店構えで、地図棚に壁面を奪われた和室には呉服屋のそれに似た趣もあり、前掛・和服姿の店員が客の対応をした。昭和 16 年 4 月以降、地形図の購入には証明書が必要になったが、小林商店では、それを提示した記憶が無い。顔なじみになっていたものか。地図類の元請業者には、他に武揚堂があった。

14) 現、玉山(ユイシャン)、海拔 3,997m で当時の日本最高峰。対米英開戦指令の暗号電文「ニイタカヤマノボレ」は有名だが、本誌を飾った理由は、昭和 5 年にこの地域を対象として日本で初めての大縮尺図への写真測量の採用が決定され、翌々年に平板測量との併用で地上写真測量を実施した(武田通治：測量古代から現代まで・古今書院, 昭和 54 年 7 月。による)由縁にある、と推測される。

15) 満州第四三九部隊・(同?)第一三七二部隊・支那派遣軍総司令部第十五号・第二六一七部隊及其他、さらに、連絡主任者として、北支方面甲第一八〇〇部隊・中支方面支那派遣軍総司令部第十五号(前出)・南支方面波第八一一一部隊・マライビルマ方面岡第一三七一部隊・ジャワ方面治第一六〇二部隊・フィリピン方面渡第一六〇〇部隊などに所属する個人名。

16) 木本氏房：航空測量(科学選書, 白水社, 昭和 20 年 11 月)は、文庫判ながら、実体験に基づく空中写真測量万般の詳しい解説書である。写真利用の実例として、森林・地籍・塩田台帳の整備、水力発電・都市計画・港湾設計など、満州での事業も挙げられている。一方、西尾元充：空中写真の世界(中公新書, 中央公論社, 昭和 44 年 4 月)は、撮影と利用の過去・現在から未来展望にも及ぶ平易な解説書で、戦中の満航写真処の活躍や、日本軍が写真判読の応用面で如何に立ち遅れていたか、なども語られている。なお戦前の刊だが、帝国森林会：航空写真測量と其応用(丸善, 昭和 11 年)は、嶺一三・木本氏房両氏の編著で、樹種判読や材積調査法に詳しい。

17) 配給米を瓶に入れ八タキの柄の竹棒で搗くと、精白されて舌触りが良くなるが、量は減る。電気製パン器は、両端辺の内側に銅かアルミの板(電極)を張り付けた弁当箱大の木箱。塩とイースト菌または膨らし粉を混ぜて練った小麦粉を満たし、通電すると蒸しパンに化ける。気の利いた発明品であったが、簡単に自作出るので、考案者が巨利

を得たとは聞かなかった。巻煙草も店頭 1 個売りから隣組単位での中身だけの配給制になり、立会人を交えて戸別に秤量分配する面倒さが加わった。刻みが粗いので、煙管では吸えず、巻紙にポケット辞書などのインディアン紙が利用された。鉛筆などで巻癖を付ければ簡単に巻けるので、煙草巻器はあまり売れなかったらしい。

18) 半ドンの起源には 2 説あり、オランダ語ドンターク(休日)の略とするのが正道だが、日曜や休日をドンと呼んでいたかは疑わしいし、異説の方が面白い。昭和の初め頃まで正午に発射されていた空砲の音から転じて、ドンが時報の意味になった(ここまでは事実)が、半日勤務の土曜日には、ドンを半分聞いて帰れると、半ドンの名が付いた、と云う。

19) K.Troll (C.Troll と同人): Luftbild und Okologische Bodenbetrachtung. Zeit-schrift für Erdkunde zu Berlin. Nu.?, 1940,

20) 高校在学中の病気休学で遅れたが、水路部に就職したながたに長谷実君の元同級生で、私とも同年。空中写真には大いに興味を抱いていたが、卒業後間もなく、少年時代からの夢を生かして「鉄道模型趣味社」を起し、同名の雑誌ほかを出版して業界に名を馳せた。この社名・誌名は、戦前の「鉄道趣味社」のコピー。

21) 1930 年にドイツ、カールツァイス社が開発した自動航空写真機で、F:6.3 のトポゴンレンズ付き。10/18 とは、レンズの焦点距離が 10cm で画面が 18cm 角の意味。

22) 小西六社史によれば、六櫻社がアメリカのフェアチャイルド社 K-8 型を模倣して試作、昭和 5 年に完成した。レンズはヘキサ-f:25cm、幅 24cm×長さ 23cm の「さくら航空写真フィルム」を使用。以後 K-8 と共に昭和 9 年まで日本の空中写真測量並びに森林判読史上に残る南樺太全域の撮影に使用され、敗戦時までには 2 千~3 千台製造された。昭和 19 年からは、日本光学社も f:50cm の同型機を約 6 百台製作した(武田通治:前出書)

23) 13cm×18cm 判は、乾板使用またはフィルムを手動巻上げた初期の航空写真機に一般的なサイズであった。丹羽長道(六櫻社):航空写真.共立社,昭和 13 年 6 月.には航空写真機や付属機器、感光乳剤などの記述が豊富で、独・英・米と数種の 13cm×18cm 判カメラが紹介されているが、交換レンズを含め焦点距離 40cm の目をもつ写真機は見当たらない。高高度からの偵察用として、外国製カメラに国産長焦点レンズを装着したものかも知れない。本文で触れた写

真も手動巻上げらしく、隣接写真の重複度が低く、不統一でもある。

24) 陸上機の B25 双発爆撃機を、航空母艦から発進(中国に着陸)させるという奇策での日本本土初空襲。被害の一つ「皇居炎上」は、一般国民には伏せられたが陸軍と右翼勢力をいたく刺激した。責任を問われた海軍は、乾坤一擲、総力を挙げてミッドウエー基地を攻撃、占領しようと、結果論的には無謀な作戦に打って出て大敗。以後の戦局にも甚大な影響を招いた。だが、仮にこの作戦に成功しても、日米の資源量・生産力・技術力の差から、ガ島やアッツ島・硫黄島と同じか、良くてラバウル基地の運命、であつたらう。

25) 当時はネガカラー乳剤も開発中で、日本では昭和 19 年に富士写真フィルム社が試作に成功したが、先に商品化されたのは同社や小西六六桜社などのポジカラータイプであった(武田通治:前出書)

26) 武田通治:同じく前出書。

27) 昭和 20 年の手帳日記一月欄には、1 日(月):「三十一日夜ヨリ一機宛三回来襲、焼夷弾、末広町火災生ズ。翌 2 日(火)からは、正月返上の毎日登学。5 日(金)は 8 時半~4 時半の日直勤務で「午後八時一機、焼夷弾、火災生ズ。翌 6 日も「午前五時一機、焼夷弾」。独り郷里の家を守る母を迎えに帰郷して、当夜から不在。9 日(火)には帰京して、「十三時半頃ヨリ B29 二〇機内外来襲」。この頃から本格空襲が始まったらしい。17 日(水)「五時頃一機来襲」。19 日(金)「八〇機阪神来襲・二機午後(東京)来襲」。以後は、なぜか記入が長く欠落して、2 月 19 日(月)「敵機約九〇帝都来襲」、25 日(日)「上野・神田付近昼間盲爆」だけ。後記の地人書館被災はこの時らしい。社屋が神田区淡路町(現千代田区神田淡路町)にあった。これ以後の記事も無いが、空襲が常態化した(?)ためか。昼間低空での空襲は、数列の縦隊を組んだ複数のグループが、北西風に乗って次々と断続的に飛来する波状攻撃。辻村教授・院生・学生の数名で、二号館屋上から 3~4 回ほど観察した。大学の近くでは、小石川区春日町の某私大所有地と上野公園とに高射砲陣地があり(今の礪川公園と噴水池がそれぞれの跡地)とくに前者からの反撃が良く見えたが、砲弾炸裂(小さな雲が出来る)の高度はほぼ的確ながら、なぜか常に敵機の尾部から数十メートルも後方であった。炸裂から雲の発生までのタイムラグ、と説明する人もいたが、打撃を与えた様子も見られなかった。初期には味方戦闘機の

反撃もあったが、敵機の後方上空に上昇してから急降下気味に攻撃する戦法なので、標的を一機に絞って追尾することが出来にくく、一方、体当たりを狙っても命中せず、隊列を崩さない敵機群に逆に撃墜されるなど、痛ましくも歯痒い状況ばかりであった。市街地での撃墜を意識的に避けた、との弁明(?)を目にしたこともあるが、信じ難い。一度だけ、遙か東京湾上空での撃墜成功を見たが、胴体と主翼が分離し、前者は真っ逆さまに落下。後者は木の葉のようにゆっくり左右に舞いながら落ち、やがてビル群の彼方に巨大な煙の塊が立ちのぼった。ジェット機による9・11テロと違いガソリン系燃料なので、爆煙は大きくともすぐに消え失せたが、戦争の儚さを感じさせられる一瞬でもあった。この屋上観察は、やがて、赤門前防空監視哨からの大学本部への通告で禁止された。

28) 久武哲也：『兵要地理調査研究会』について。(渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』,大阪大学文学研究科人文地理学教室,2005年3月刊)には、「渡辺正氏が多田文男に、この『兵要地理調査研究会』の組織化を直接に電話で依頼されたのは昭和十九年十二月から昭和二十年一月にかけてのこと」とし、講演会の状況についての同氏の記憶にも触れられている(p.7,8)。然し筆者には、外邦図研究グループの駒沢大学での第四回研究発表会(2003年秋)の折に、臨席の渡辺正氏御自身から、この『講演会』の開催も組成も記憶の外と承り、奇異に感じた覚えがある。すでに「『兵要地理調査研究会』の組織化」を考えて居られたとすれば、『講演会』こそはその重要なワンステップであろうからである。一方、戦局の急迫を思うと、参謀本部内に年末・年始の頃から「研究会」構想があったものならば、迂遠な「講演会」無しにも即刻「その組織化」を進めるべきであろうし、地理学界もまた、要望に即応出来た筈である。実際には、『兵要地理調査研究会』の開催通知(「・・・兵要地理調査研究会合ノ件通牒」)は四月二五日、第一次会合はそのさらに5日後で、「電話依頼」から実に四ヵ月前後の時間を空費している。この間に東京は、2度の夜間大空襲を受け、旧市域の半ば以上が焦土と化して、「参集者」の間にも、今となっては遅いんだヨナ!の空気が流れていた。

29) 前記『研究会』への参加者は、京浜と近郊の在住者に限られ、3月下旬の日本地理学会常務評議員会で人選され、数日後に確定した。渡辺氏資料の「第一次参集者芳名」にある多田・田中・辻村・花井・三野・村松・渡辺の各氏は

日本地理学会役員(大部分が上記常務評議員会メンバー)新井・伊藤・^{すがい}西水・矢沢氏らは、役員外ながら職域・専門の見地から選出された。また木内氏は東大助手で学会書記、佐藤・吉川は東大大学院特別研究生で、書記の補佐として常務評議員会に陪席していた。ちなみに、当時、学会の役員は、会則には総会出席者の互選とあっても、執行部提出の原案を賛成多数で採決する一種の「^{よくきん}翼賛選挙」で選出されていた。京大出身の村松氏は、京大、ないしは関西・西日本の代表と目されて、学会役員以外にも推薦や選出の憂目にしばしば逢われたが、この場合にも同じであったろう。その一方、京都在住の小牧實繁氏は、会員ではあっても、日本地理学会からの上記推薦者では100%あり得ない。なお付言すれば、当時、辻村・多田両先生は、この世界では知る人ぞ知る関係にあり、多田先生を通じて順調に「組織化」を進め得るとは、当の多田先生はもとより、在京地理学者らの考え及ぶところでは無かった。講演は恐らく、使者を通じて、参謀本部(部局は不明)から直接、田中・辻村の両先生に依頼されたものであろう。辻村先生は電話嫌いでもあったから、日時・演題などの打ち合わせに、^{なんびと}何人かが介在した可能性は残る。但し、以上のことは、『研究会構想』への多田先生の積極的関与を否定するものではない。

30) 当時使用された焼夷弾は、閉じた下部(先端)に火薬と発火装置をもつ直径10cm内外、長さ50~60cmほどの六角ジュラルミン筒に粘着性の強い重油・獣脂を詰め、後端に姿勢安定用の細長い白布を付けた単体を数十本、蜂巣のように組み合わせたもの(二段重ね、の説もあった)が一個の弾体で、ニックネームが「モロトフのパン籠」。「籠」の中心にも火薬装置があり、地上100m前後の高さで破裂。同時に各焼夷筒にも着火して散開。花火のように見えた。着地と同時に先端の火薬が炸裂し、燃える油脂を二階程の高さまで噴出する仕掛けで、バケツ程度の水では消火も至難。中心部に爆弾を仕込んだタイプもあり、重い爆弾が先に着地して消火陣を殺傷し、続いて焼夷筒が雨降る効果万点の仕組みであった。

31) 都市の集積度を減じ弱者を避難させて防災力を高める「疎開」には、人員・家財・建物、また自由・強制的の6種があった。ただ、教師が引率する学童疎開は参加自由でも実質は強制であり、財産を減らし費用もかかる建物疎開は、ほとんどが強制疎開であった。

32) 「証明申請」の雛形が残っているが、それに付ける「申告書」なるものには、旅行目的・職業及地位・乗車区間・購

- 入順番（意味不明だが、複数の希望列車を順位付きで申告させたものか？）・勤務先住所・氏名年齢、の諸項目がある。また、30 銭の証紙貼付。出来るだけ煩瑣にして旅行を諦めさせよう、の構えだったらしい。
- 33) 17 年頃から、「国民服」と称するカーキ色で軍服紛いの折立襟服と、兵隊の「戦闘帽」に似せた同色のつば付き「国民帽」が、半強制的に推奨されていた。
- 34) 「穂高」は、当初の疎開予定先だったらしい。「回遊券」でも間違いで、これでは通用期間が僅か 4 日、玉川村滞在にも不足する。半ば軍務詐称（？）の片道切符、が正解。
- 35) 塩は、煙草と共に専売品ながら、不足原料資源の一つとして 17,8（？）年頃から自家製塩が認められ、米と有利に交換でき闇市でも歓迎されるとあって、自然条件などは何のその、海水を煮詰めるだけの小規模製塩が全国的に広まっていた。
- 36) このことは完全に忘れていたが、過日、再発見。華北・華中を主におそらく 57 枚であった。一部に火熱による傷みがあり、用紙の風化も進んでいる。
- 37) 最後の玉川村出張は 9 月 3 日からの週で、小淵沢付近や塩尻～村井の辺りを巡検した。上空をダグラス DC3 輸送機が飛び回っていたが、近くにある（らしい）米兵捕虜収容所への物資補給（パラシュート投下）が目的、とかは駅員の話。なぜ即刻解放収容しないのか？と疑問に感じたが、彼らにも都合や順序があったのだろう。学生の疎開は翌週で終了したらしく、9 月 29 日（土）には教室で卒業生の送別会を開いている。なお 10 月 8 日（月）に、G.H.Q. 天然資源局の地質学者ソープ氏他 2 名が教室に来訪。辻村・多田両先生も出席して「談話会」が開かれた。米側学者との最初の接触であった。
- 38) 前出 28、『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』付録の信濃毎日新聞所載特集記事文末の [注] (116 頁) には、「当時の波田国民学校日誌に「九月二日・・・内務省国土局地理調査所開所」とある。・・・」とあるが、岡山俊雄先生によれば、「・・・九月一日に、かつて地理局のあった内務省に付設された・・・。」（『渡辺光その人と仕事』、渡辺光先生追悼録刊行会、昭和六十年四月、125 頁）
- 39) それら以外の写測資料もかなり含まれていた。戦後、黒砂町地理調査所時代の武田氏に事の次第を報告し、それも忘れた頃、返して欲しいと電話があり、使いの方にお渡しした。日本大学文理学部に地学科が新設され、武田氏がその教授になられて数年後のことである。現在は、何処に保

管されているのだろうか？

- 40) 戦後も地理調には残存分があり、紙質が良いので、雑用紙として白い裏面が利用されていた。例えば「写真測量」誌の編集離形に使われたそれは、凡例の日本語訳を付した単色刷り旧蘭印二十万分一図であった。
- 41) 但し、資料集口絵写真、「兵要地理研究課題決定要領（図 7）」のキャプション、「・・・研究会で配布された・・・」は説明不足で、この図（及び 69 頁の表）は、研究会での討議の参謀本部側担当者による取り纏めである。「配布された」ガリ版刷りは表題末尾に「・・・案」とあり、「項目」欄以外は参集者自身が書き込むよう、空欄になっていた。また項目末尾の「東亜二於ケル米英「ソ」関係ノ歴史的並二地政学的考察」は、当日、参謀本部側から提じた案、追加された項目で、配布物ではここも空欄。備考欄に、「二、空欄ハ爾他ノ研究課題出デタル場合ノ予備トス」とある。原題も「東亜二於ケル米英「ソ」関係ノ推移・動向判断、特に北方ヨリ侵略する形態・限度」で、「北方」には「ソ」の書き添えがあり、中立条約はあっても、ドイツの降伏でソ連参戦が不測の事態ではなくなっていたことを示している。ここを「・・・歴史的並二地政学的考察」と変えたのは、恐らく研究会終了以後のことで、小牧先生以下の参入余地を設けたものと解される。また、報告書類の提出期日も備考欄には無く、当日、口頭で告げられ、当初の「五月中旬迄報告」が、会議終了近くに、十三日（日曜）午前九時、と細かく明確にされた。余事を云えば、「第一次・・・會合行事予定表」と共に配布された半枚の「目的」と「要領」のプリントは、表題が「部外関係者ノ統合ニヨル・・・會合」となっている（前書 61 頁）が、これは刷り直して貼り付けたもの。参本の立場からは原題の「統合利用」でも、「利用される」側からは不愉快。礼儀知らずとも受け取られよう、と気付いた方がいらしたらしい。さすがは参謀！とお褒めしてもよいが、裏側から原題が読み取れるのは、頭隠してナントヤラのいろは歌留多。使用藁半紙が他文書よりも一段と薄かった（半ペラなのでそれでも間に合う）のが原因。紙不足の反映ながら、軍の大本山でさえも・・・と。
- 42) 正式名は「銃剣」で、刃渡り 30cm 前後の短剣。普段は腰に下げ、「肉弾戦」では銃の先端に取り付けて槍のように使う。
- 43) 直径数十メートルの大風船で、時限爆弾を付け偏西風に載せて飛ばした。オレゴン州で山林を焼いた、と報じられたこともあるが、戦果はほとんど無かったと思われる。

44)戦後 27 年近くも経って、グアム島の地下壕から横井軍曹が発見された。「拠点」戦法は、日本軍の戦術に全面的に組み込まれていたらしい。

45)昭和 21 年か 22 年の頃、東大正門前で学生服姿の角田氏に出会った。軍関係者の国公立大編入学が認められた結果で、法学部に合格の由。笑顔が将校時代よりも若返った印象で、何よりもサバサバした風情であった。

46)例えば、B29 は 3 トンの爆弾を積んで 8,600km の航続距離を持ち、9,500m の高度で最高時速 590km であること。また、急造滑走路用資材には「鉄筋アスファルト平板」「穿孔鉄板」「金網」の 3 種があることやその特徴・建設時間など。また、野砲・山砲級の小型砲弾でも「軟土」には 3m、「礫石」でも 50~80cm の地下にまで破壊力を及ぼし、中型の 24cm 砲でも、それぞれが 10~12m、3.5~4.5m と増大すること、などなどがわかる。これでは我が拠点群も、軍用犬が訪れる前に、悉く壊滅・埋没していたに違いない。

47)印刷用紙難は戦中よりも悪化し、印刷所不足も未だに続いていた。地理学界での雑誌出版は昭和 21 年 1 月 1 日発行の『国民地理』がトップであったが、用紙は今日のザラ紙より遥かに軟質粗糲(そびん) (同誌の表紙は片面アート紙だが、発行元目黒書店の在庫品であった由)。しかし、2 年半も後の『写真測量』初号の本文紙は、さらに粗悪で弱く、今では茶褐色に変色して崩れるように破れる。B5 判、9 ポリ組 8 ポリ行間、表紙共 16 頁。日本地形社・富士写真フィルム・写真測量所から 1 頁大広告を受け、共同印刷の好意でやっと出版できた。表紙には筆者の素稿を会長に点検補正して戴いた「発刊の辞」を載せ、理事会記事と例会等の学会消息に 2 頁を費やしているから、研究発表や論説は正味 10 頁である。

48)第 1 巻の次号は、翌昭和 24 年 8 月(表紙には May-1949 とある)に第 2~4 号の合併号として発行した。そのころ筆者は日本地理学会の編集担当書記であったので、そのついでで「写真測量」の発売所も古今書院に委託し、判型を当時の「地理学評論」に倣って A5 判に縮小。本文 104 頁、表紙に目次、口絵にアート紙の立体写真を、本文頁にも図版を載せる、と、ようやく学会誌らしい体裁を整えた。会費の他、日本地形社・写真測量所・日本航測、及び第一測量・八洲測量建設・中央測地社からの広告料(米軍写真の恩恵もあって、測量会社続出の競争期であった)前 23 年度の文部省「学会誌出版補助金」などにより出版出来たものだが、毎理事会の場所や書記役山本氏の労務を提供して戴い

た写真測量所や発売所古今書院にもかなりの負担を掛けた筈である。2 巻 3 号以降に載せた学会会計の決算書でも、つねに会費収入に近い金額を「寄付金その他」で計上している。なお、当時はすべてが闇価格の時代で、手帳には、45 斤、連^{れん}675 円 = マル公 15 円の文字も残る。斤は重量から来た紙の厚さ。1 連は洋紙全判 500 枚(今は 0 判、1,000 枚)公定価格 15 円のもの^{れん}が闇値では 675 円と、じつに 45 倍もした。逆説的には、低すぎる公定価格が闇物価を高騰させていた。また、菊判 32 頁、500 部での原価計算表[地理評を組見本としての計算で、組代 544、刷代 480、紙代 3,000、製本代 200 + 0.4、表紙 1,000、流(流通費のことか) 250、製図代 1,000、計 6,474 (円)で 1 部宛価格 15 円、市販売価 25 円が妥当、との見積]もある。以下、2 巻 1 号, Autumn-1949, 24 年 12 月発行, 58 頁(この号に「渡辺測量株式会社」の広告があるが、渡辺正社長とは渡辺少佐殿か?)、2 巻 2 号, July-1950, 25 年 8 月, 46 頁。2 巻 3 号, Dec.-1950, 26 年 1 月発行, 66 頁。2 巻 4 号, May-1951, 26 年 6 月発行, 58 頁。3 巻 1・2 号, Dec.-1951, 27 年 4 月発行, 86 頁と年刊誌状態となり、最終号に至った。また、28 年 3 月の森林記念館での諸講演を主にして、『10 人が語る日本と海外の航空写真』A5 版 86 頁を、日本林業技術協会との共同企画・編集の形で、29 年 2 月に刊行した。

49)例えば、統計調査局資料(第四輯):航空写真の利用価値の調査について(農林省統計調査局,昭和二十三年二月)。これは、耕地面積または作付け面積の調査に、航空写真がどれほど有効に利用出来るかの試験調査で、申告面積との比較表もある。学会も協力した。また、新家義雄:航空写真測量について、河川,第六巻,第二号,日本河川協会。昭和二十五年三月。清水勇・逆瀬川清丸:航空写真による地質判読の手引,通産省工業技術院地質調査所(謄写版報告書),昭和 27 年 3 月。など。

50) 篠邦彦:写真測量法概論 pp.46,昭和 23 年 12 月。武田通治:空中写真測量の手引き pp.183,昭和 24 年 11 月。佐藤久:空中写真による土地調査と写真判読 pp.194,昭和 25 年 11 月。武田通治:図解射線法の実際, pp.265,昭和 28 年 5 月。発行・発売所は機関誌と同じ。

51) 武田通治、前出書、45 頁。

52)1958・60・63・66 年と実施したが、大学紛争により中断し、地理学教室の参加も挫折。ペルーでは陸軍省陸地測量部で空中写真を扱っていた。1958 年の第一回調査の折、大使館を通じて閲覧許可を得たが、当方の時間的制約から部分的

にしか観察出来なかった。太平洋岸から高原までのほぼ全域（アマゾン側低地は米石油会社が当時撮影中）が揃っているようで、係官は明言しなかったが恐らく米軍の撮影。地図化は未だし！の状態、写真も販売不許可（なぜか数枚の写真が手元にある。後年の購入品らしい）。地図も、アルゼンチンに委嘱作成した多色刷二十万分一図（アマゾン低地を除く）しか無かった。定価が25ソーレス（約2ドル。当時は1ドル360円の時代）で、通訳の勘違いから5ソーレスと解し、先方も「日秘友好」上その価格で販売してくれた。筆者のもとにも一揃いが残っている。1958年のポリビアも類似の状況にあったが、この陸地測量部はマルチプレックス図化機を1台所有して作業中。係官は「日本にもあるか？」とご自慢で、「^{アイ}バスタンテ」に「^{アビノモート}味の素の国だからナ」と残念そうだった、とは、日系人通訳の話。トヨタのランドクルーザが走り回っている国での認識不足(?)である。米軍撮影による空中写真の購入も許可された。国土の中央から東の範囲（集落と人口が多い）で部分的ながら地形図が完成していたが、それ以前に、地質図の基図として等高線などが使われているらしく見えた。首都大学東京の地理学教室には、この1960年代頃の地形図が揃っている筈である。チリでは、多色刷二十万分一図の他に、地下資源の豊富な北部の砂漠地帯から写真測量図の作成が始められ、1960年現在で10枚前後の図葉が完成していた。同年、チリ地震の直後には、地形図は見られたが、写真（ここでも恐らく米軍撮影）は閲覧できなかった。